



最果ての魔法使い

岩柄イヅカ
Iwatsuka Izuka
咲良ゆき

GA文庫

The wizard of the Farthest

GA文庫11月の新作 『最果ての魔法使い』 試読版

プロローグ 『かつて世界を救った魔法使い』

死んだ方がまし。というのは、今の彼のような状態を言うのだらう。

大地を抉り取ったかのような巨大なクレーター。その内側の斜面を、血塗れの外套がいつとうに身を包んだ黒髪の青年は、
這はい進んでいた。

青年の左肩から先、そして腰から下は水銀のようなものに覆おおわれている。

水銀は自分の一部を針のように変化させ、青年の皮膚を食い破って体内に侵入し、触手のように蠢いて筋肉と血管をグチャグチャにかき混ぜていく。痛みだけは感じないように神経を切るのは避けているのは何という悪辣さか。

—痛い。痛い。熱い。痛い。

身体の中で水銀が蠢く痛みに頭の中で火花が散る。神経と骨の表面を撫でられる感覚に怖気が走る。

それでも青年は悲鳴を上げない。歯を食い縛って前だけを見る。

（まだだ。まだ、まだ……！）

左腕と両足はもう動かない。唯一まともに動く右手で

土を搦つかんで身体を引きずり、ナメクジのように血の跡を残しながら地面を這う。

青年の目指す先、クレーターの中心には天を突くように夜空に伸びる紅い大樹があつた。

枝葉を伸ばして天を覆い、静かに明滅を繰り返すその姿は何も知らずに見れば幻想的に感じたかもしれない。

青年が前に進むたび『止まれ』と言うかのように体内に侵入した水銀が動きを激しくする。

おそらく肺を傷つけられた。喉のどを熱いものが駆け上がり、口を開いた瞬間それが水銀の混ざった血の塊とな

って吐き出される。咳せき込むたびにその量は増えていき、地面に赤と銀色の混ざった気味の悪いマーブル模様を描

き出す。

(諦あきらめない。諦めてたまるものか……！)

歯が砕ける程に食い縛る。

—ここで諦めれば全ての犠ぎ牲せいが無駄むだになる。

たくさん仲間がいた。尊敬する師がいた。頼りになる上官がいた。気心知れた友人がいた。大好きな幼おきな馴染なじみがいた。護まもりたい部下がいた。

死んだ。自分を進ませるために、みんな死んでいった。

—それだけは駄目だ。どれほどの苦痛も耐えてみせる。

ただ、彼等かれらの犠牲が無意味になることだけは、受け入れるわけにはいかない。

意識を体内に向ける。自身の体内に流れる力—魔力

を集め、束ね、^{たば}筋肉を硬化させ水銀の動きを阻害しつつ傷ついた臓器を再生する。

あくまで時間稼ぎ。水銀の動きを止めるのにも限界があるし、臓器を治したところですぐにまた壊される。

だが幸い、あるいは不幸にも壊される速度と再生させる速度では、後者の方が若干早い。

ならば魔力が続く限りすぐに死ぬことはない、と青年は獣じみた笑みを浮かべ焼け付くような痛みを耐えながら前に進み続ける。

—どれだけの時間が経^たつただろうか。

ナメクジのような行進はついにゴールに辿^{たど}り着いた。

伸ばした手が紅い大樹に届く。触れただけで大樹の内包するとてつもない魔力を感じる。世界中の魔法使いが寄って集って使ったとしても使い切れそうにない膨大な魔力だ。

その一部を操作し、自分の中に取り込む。ほぼ底を尽きかけていた自身の魔力が見る間に回復していくのを感じる。

青年は小さく呪文じゅもんを唱える。すると手に青年の背丈程の、柄の部分に宝玉を埋め込んだ杖つえが現れた。それを地面に突き立て、すがりつくようにして立ち上がる。

—封印式、起動。

杖の先端で地面を叩たたいた。叩いた場所を中心にその場

一帯を内側に収める巨大な魔法陣が展開される。そこから無数の文字が現れ、大樹を縛り上げるように文字が表面を駆け上がっていく。

ぐにやり、と周りの景色けしきが歪ゆがんだ。

「……ばいばい、みんな。少し、頑張ってくるよ」
青年は小さく笑ってそう言った。そしてもう一度杖で地面を叩いた次の瞬間、周りの土地ごと紅い大樹と青年はこの世界から消え失せた。

十

それから少し、時が流れた。

「この僕、アルカリーニールクは魔法使いだ。代々優秀な魔法使いを輩出してきた家系の出身で……うん、まあ、自分で言うのもなんだけど、その中でもとびきりの天才として大切に育てられた。生まれ持った膨大な魔力、その魔力を操る^{あやつ}センス。そして何より、僕は魔法というもののが大好きでね。暇さえあれば魔導書を読んでいたし、他の人がびっくりするような新しい魔法を作るのが趣味だった。魔法を勉強する時間を増やしたいと思考加速と眠らなくても大丈夫になる魔法を作った時は学会が大騒ぎになったたっけ。……これ、やっぱり自分で言っでて結構照れくさいな」

そう言っで青年は自嘲^{じちよう}するように笑みを浮かべる。

「……寂しいさびからってお守りに自慢話まひなしてる今の状況が一番恥ずかしいのかもしれないけど」

何もない真つ暗闇くらやみの空間にポツンと浮かぶ島。そこに鎮座する紅い大樹の前に青年―アルカ―ニ―ベルクは座り込み、首から下げた紅い宝石のペンダントに話しかけていた。

辺りはどこまでも静かで風の音すら無く、アルカの声だけが暗闇の中に消えていく。

「それでどこまで話したっけ？　そうそう、たしかに僕は天才かもしれないけど、何よりも周りの人達に恵

まれたんだ。

僕の両親は『魔法はみんなを笑顔にするためにあるんだ』って、僕の才能を大切にしつつも才能に溺れおぼさせることはなかつた。うん、あれがなかつたらきつと僕は相当嫌な奴やつになつていただろうね。

それに小さい頃から毎日一緒に遊んでいた幼馴染は周りから浮いていた僕のそばにいつもいてくれた。彼女に新しく覚えた魔法を披露するのが一番の楽しみだったんだ。

他にも僕の才能を育てて、より高みへと押し上げてくれる師匠がいた。王国軍に入ると対等に接してくれる友人ができた。ちよつと恐いけど僕のことをおも想つてくれる

上官ができた」

アルカはそこまで一気に言っつて、切なげに眼を細めた。「うん、本当に幸せだったよ。……幸せだったんだ」

思い出す温かい日々。

幸せだった。魔法が好きで、周りの人達が好きで、毎日が楽しくて楽しくて仕方なくて、それに心から感謝していて。世界中探しても自分以上に幸せな人などいるのだろうか和本気で考えるぐらいに、幸せだった。あの日までは。

あの日、空から紅い隕石いんせきが落ちてきた。

今にして思えばあれは種だったのだろう。種はそこにあった街を一瞬で吹き飛ばして地下深くに潜り込み、根を張り、あつとという間に紅い大樹へと成長した。

そしてその紅い大樹——魔樹はまるで胞子を撒き散らすように、瘴気しょうきと呼ばれる微細な物質を世界中にばらまいた。

瘴気は他の全ての生命に毒だった。長時間吸い続ければ徐々に衰弱し、やがては死に至る。

そしてそれで終わりではない。瘴気に冒され死亡した生物は理性と元の姿を失い、怪物になつて蘇よみがえった。

魔獣と呼ばれるようになったその怪物の強さは驚異的だった。

個体差はあったものの強力なものなら一体で一つの砦^{とりで}を攻め落とすことすらあった。そしてそんな魔獣が世界各地で猛威を振るった。

もちろん生き残った人々もそれに対抗しようとした。だが数も質も向こうの方が上。そんな魔獣が一日中でも一週間でも一ヶ月でも休み無く押し寄せてくるのだ。生き残った人類は次々と駆逐されていき、一年も経つ頃には世界の人口は元の百分の一ほどまでに減っていた。

しかし、光明^{けいみょう}はあった。

研究の結果、魔獣は魔樹が放出する瘴気をエネルギー源として動いていると、そしてその瘴気を遮断すれば活

動を止められると特定した。つまり、魔樹さえどうにかできれば魔獣を止めることができる。

とはいえ魔樹はあまりに強固で巨大だった。いかな物理兵器でも大魔法でも、完全に破壊するのは不可能だった。

……しかし、それはアルカが解決した。もっとも、解決と言うにはあまりにもあんまりなものではあったが。

—異空間封印魔法。

アルカが生み出した、一定範囲内のあらゆるものを世界の外側、異空間へ閉じ込め封印する極大魔法。

とはいえそれは未完成の魔法だった。異空間に関して

はアルカ本人にもわかっていない点が多く、そもそも人間が理解できるような答えがあるのかすらわからない不安定な魔法だ。

だが時間がなかった。人類はもはやそれに賭^かけるしかなかった。

残った全ての戦力と資材を投入し、魔樹封印作戦は実行された。そして参加した兵士や魔法使いがほぼ全滅という多大な犠牲を払いつつも、その作戦は成功した。

ただ、異空間封印魔法にはいくつか重大な欠点があった。

一つ。術式があまりに複雑であり、製作者のアルカ以

外には使えないこと。

一つ。術者は封印対象と共に異空間へ行き、日々変化する異空間の状態に合わせて術式を書き換え続けなければならぬこと。

一つ。術者は封印の間、長時間意識を途切れさせてはいけないこと。

アルカが魔樹を異空間に封印してからすでに三ヶ月が過ぎていた。

魔樹から溢れ出している魔力の量は膨大だ。皮肉なことにその魔力を使えば封印を維持するのは容易かつたし、アルカの技術をもつてすれば『肉体の時間の流れを止め

て擬似的な不老不死となる』という常識破りも可能だつた。

肉体面の問題はすでに解決している。なので後は精神の問題だ。

この封印の性質上、アルカは意識を失う訳にはいかない。それが何年でも何十年でも何百年でも。長時間意識を失えば封印が解け魔樹は元の世界に戻る。そうなれば再び魔樹は瘴気をばら撒き、かつての惨劇が繰り返されるかもしれない。

これまでの人生に思いを馳^はせる。

（いいかいアルカ。魔法ってというのは、みんなを笑顔に

するためにあるんだ)

初めて両親に魔法を教わった時の言葉は今でも胸に残っている。

(見事だ。お前ももう立派な魔法使いだな)

いつも厳しかった師匠に初めて褒められた時のことを思い出すと思わず頬ほおが緩ゆるんでしまう。

(アルカ、あたしね、あなたのことが……好き)

決戦前夜に幼馴染にそう言われた時は涙が出るほど嬉うれしかった。

(行くぞ！ここに集いし一騎当千の英雄達よ！心せよ、これは世界を救う戦いである！)

そう高らかに演説した上官はアルカの盾たてになり死んで

いった。

首から下げた紅い宝石のペンダントを愛おしいとそうに撫でる。

それは決戦前夜に『みんなで作ったお守りだよ』と幼馴染がプレゼントしてくれたものだ。ーそしてアルカの手元にある唯一の、仲間達の遺品でもある。

かつての仲間達を思い出し、切なげな笑みを浮かべた。「大丈夫だよみんな。僕は頑張れる。絶対に、みんなの犠牲は無駄にしない」

自分に言い聞かせるようにそう言った。

—そうして、一年が過ぎた。

（元の世界はどうなっただろうか？ 無事に復興できているだろうか？ 生き残った人達は……あの子は元気にしているだろうか？）

魔樹の前に座り込みながら外の世界のことを考える。
……自分の屋敷に仕えてくれた幼い召使いの女の子には、自分がもう帰ってこないことを伝える事ができなかった。

『美味おいしいご飯を作って待ってます』と無邪むじゃ気に言った
その子の笑顔を思い出すと胸が締め付けられる。

……悲しい思いをさせてしまっただろうか？ 寂しい
思いをしていないだろうか？ 最後にもう一度、頭を撫

でてあげたかった。そんな事を考え、自嘲気味に首を振る。

「……やめよう。考えると元の世界が恋しくなってくる」

時間と魔力はいくらでもあるので、資料も機材も無い状態ではあるが魔法の研究に打ち込むことにした。

魔樹が現れてから忙しくて、研究したいことや考えたことがいろいろ溜^たまっていたのだ。

—それに、魔法のことに没頭している間は寂しさも少しだけ和らいだ。

—十年が過ぎた。

(寂しい。まずい、しんどい)

肉体の三大欲求、食欲、睡眠欲、性欲は肉体の時間を止めることでだいたいは克服できた。

だが精神の欲求、他人を求める欲というのは、如何いかんともしがたいものだった。

(昔は何ヶ月も研究室に籠こもりきりでも気にならなかつたのに。寂しい、寂しい。誰だれかと話したい。僕の声に応えて欲しい)

だから昔の楽しい事を思い出して自分を慰める。なのに、ほんの数秒ではあつたが、自分を命がけで守つてくれた上官の名前がすぐに出てこなくて怖くなつた。

—五十年が過ぎた。

以前のような人恋しさはあまり感じなくなってきた。
た。

—いや、違う。大切だった人が、会いたい会いたい
と思い続けていた人の記憶がどんどん薄れていくからそ
う感じるのだ。

まだ親や幼馴染の名前と顔ははつきり思い出せる。だ
が、地面に書いた友人の名前を見てもその顔がはつきり
と思い出せなくなってきた。

それが怖いと感じた。記憶を修復する魔法の研究を始
める。

—百年が過ぎた。

精神が枯れて、乾いていくのを感じる。

記憶が欠け落ちていく。みんなのことを思い出せなくなってきた。その後に待っている完全な孤独が怖い。全て無くしてしまうのが怖い。

—嫌だ、嫌だ、嫌だ。

ついに親や幼馴染の顔まで曖昧あいまいになつてきた。嫌だ、一人にしないでくれと泣きわめいた。記憶を修復する魔法の完成を急ぐ。

—三百年が過ぎた。

かなり時間はかかったが記憶を修復する魔法は完成し

経過も良好だ。魔法の研究の合間には修復して想起した思い出に浸って時を過ごすようになった。

（……元の世界はどうなっただろうか？ 魔法の技術もさぞ進歩したんだらうな）

元の世界の想像を膨らませるのを数少ない楽しみとしつつ、自分も魔法の研鑽けんさんに勤いそしむ。

—五百年が過ぎた。

記憶を修復できなくなってきた。

どうやら修復の回数は無制限とはいかないらしい。何度も何度も修復した記憶ほど修復は難しくなるようで、他の事は思い出せるのに親しくしていたはずの人達の顔

を思い出そうとすると顔の部分が虫食いになっただかのよう
うに欠けている。

—七百年が過ぎた。

もう誰の名前も顔も思い出せない。

それでもかつて紡つむいだ絆きずなの温ぬくもりがまだ残っている。
それを燃料にして魂を燃やし続ける。

—九百年が過ぎた。

封印を始めた時から研究を続けていた最後の魔法がよ
うやく完成した。嬉しい気持ちになるなんていつ以来だ
ろうか。

ただ、不意に意識が飛ぶことが多くなってきた。すぐに我に返ってはまだ目の前に魔樹があることに安堵あんどする。そんな毎日を送っていた。

—千年の時間が、流れた。

意識が朦朧もうろうとする。今にも閉じそうな眼をどうにかこじ開け、呪文を紡ぎ記憶を修復。

けれども、かつて大切だったはずの人達のことについてはほとんど何も思い出せなかった。それでもかすかに残った思い出の残滓ざんしを振り返る。

（……正直、最初は世界の危機だと言われてもあまり実感が湧かなかった。僕にとつての世界はとて小さくて、僕にとつての大切な人……両親や幼馴染、師匠や友人、上官なんかがそれだった。僕が必死に戦ったのは僕の小さな世界を護るためだった）

一枚の絵のように、色あせた思い出を想起する。もはやぼやけて掠^{かす}れてほとんど何も見えないが、それがかけがえのないものだったということだけは今も昔と変わらない。

（まあ、僕はそれなりに強かったから周りの人達は僕を英雄だの何だの呼んだけど、僕にとつては大勢の無^む辜^こ

の人達のために戦える彼等こそ英雄だった。……みんな、死んだ。護れなかつた。僕の大切な人はみんな死んだ。僕の世界は壊れてしまった)

— だけど、それでも。

託された。多くのものを、想いを託された。

それは結局のところただの意地なのだろう。散つていった彼等に胸を張れる自分でありたい。自分に託した彼等の選択が正しかつたと証明したい。

自分が頑張ることによつて保たれた平和こそが、失つたものの価値になると信じて頑張り続けた。

(…… だけど、それも …… もう ……)

アルカは懐ふところから紅い宝石のペンダントを取り出す。

もう顔も名前も思い出せない、けれども大切な誰かがくれたもの。これまで挫^{くじ}けそうな時に何度も何度も勇気を与えてくれたかけがえのない宝物。

……それを見ても、もう心の火は灯^{とも}らない。

(ごめん……みんな……)

眼を閉じる。閉じてしまう。

(だめ……だ。まだ、あと、もう、すこし——)

一章 『魔法使いは少女と出会う』

月明かりの差し込む廃墟^{はいきよ}。そこで不意に異変は起きた。
ぐにやりと不自然に景色^{けしき}が歪み^{ゆが}、まるで空間に穴が空
いたような黒い球体が現れる。そして一人の青年がそこ
から吐き出されるように床に落ちた。

どうやら気を失っていたらしい青年は床に落ちた衝撃
に小さくうめき声を上げ、最初はゆっくりと、そしてす
ぐに驚愕^{きょうがく}に眼を見開いた。

「……………え？」

青年―アルカーニーベルクが何が起きてしまったのかを理解するのに数十秒の時間が必要だった。

硬い床の上で身体を起こし、首を動かして周囲を確認する。

屋内。どうやら大きな施設の中のようだ。床には分厚くほこりが積もり瓦礫がれきが散乱している。床のひび割れた部分から草花が生えている様子も見られる。

「ぐ……あ……!?」

全身に激痛が走る。それは魔樹からの魔力が切れ、止まっていた肉体の時間が再び動き始めた事による揺り戻しだった。

本来人間の身体は千年以上生き続けられるものではない

い。それを無理やり引き伸ばしていたことによる反動。止まり錆びついていたブリキ人形を無理やり動かすような軋み、のたうち回るような痛みに襲われる。

魔力を紡ぎ直し、揺り戻しによる激痛を抑えるまで約一時間。その一時間の苦痛が、封印が解けてしまったことをあらためて自覚させてくれた。

乱れた呼吸を整え、傍らに落ちていた自分の杖を引き寄せそれを支えに立ち上がる。

「ここは……？」

周りの様子を確認する。

人の気配は無い。アルカの知るどの建物よりもさらに大きな何かの施設。

彼がいるのはその中の広場のように開けた場所。見上げると天井てんじょうまで吹き抜けになっており五階の高さまで見通すことができた。

天井には大きな穴が空いていて、そこから月明かりが差し込んできている。少し肌寒い。

「ショッピング……モール？」

そう書かれた看板が半分ずり落ちたような状態でぶら下がっているのを見つけた。どうやら文字は自分の知っているものと変わらないらしい。

ショッピングということは何らかの商業施設と
いうことか。そう考えあらためて周りを見回す。

「だけど……この惨状は……」

壁には爪つめで切り裂かれたような跡が刻み込まれている。床には乾ききった血の跡と無数のガラスの破片が散らばっている。明らかに何かしら戦闘、あるいは虐殺があった形跡がある。

心臓が鼓動こどうを早くする。息が苦しい。どうしようもない焦燥感が湧わいてくる。

杖にすぎるようにながらまだ動かし辛いつら身体を引きずるようにして辺りを探索する。

だがどこを見ても結果は同じ。荒れ果てて、床には分厚くほこりが積もっている。人っ子一人見当たらない。物音を立てるのがはばかられるような静寂の中で自分の足音だけが響いている。

アルカはいつしか走り出していった。まだ足元がおぼつか
なかつたがそんなものには構っていられなかつた。

—誰か……誰か……誰か！ 悲鳴を上げそうな焦燥
感に苛さいなまれながら走り続ける。

そして—。

（今、何か聞こえた……！）

その方向に駆け出した。瓦礫に躓つまずいて転び口の中に血
の味を感じた。それでもすぐに立ち上がり、何度も転び
そうになりながらも音のした方向を目指す。

そうして必死に走った先で見つけたのは、乾ききって
ミイラ化した人間の死体と、それを貪むさぼり食う三匹の犬の

後ろ姿だった。

「あ……」

足を止め、一歩後ずさる。死体を貪っていた犬の一匹がこちらに気づいて振り向いた。

—その頭は縦に裂け、裂け目にはズラリと鋭い歯が並び粘液が滴したたっていた。

「魔……獣……?」

足元がぐらぐらして、立っていられなくて、アルカはその場に膝ひざから崩れ落ちた。

—魔獣がいる。つまり、魔樹が復活している。

予想はしていた。だがいざ現実として眼にすると、それはアルカの心を砕くには十分なものだった。

（自分はどれぐらい眠っていた？ 封印が解けてからどれぐらい時間が経たっている？ 世界はどうなった？ 人類は……滅びてしまったのか？）

ぐらぐらと世界が揺らぐ。抱え込むように両手で頭を包む。

（僕が、封印を守れなかったせい？）

息ができない。苦しい。苦しい。苦しい。

今まで支えにしていたものが根こそぎ奪われた感覚。

手が震える。これは悪い夢か？ 自分がわからない。現実がわからない。自分は今、何処うなにいる？

アルカに気づいた三匹の魔獣が低い唸うなり声を上げながら近づいてくる。だがそれを見ても身体が動かない。

自分を喰くらおうと三匹の魔獣が近づいて来ているのは見えているのに、それに対してどうしようという意思が湧いてこない。

バキバキと音を立てて魔獣の頭が縦に大きく裂けた。

—ああ、自分の頭を丸かじりするつもりなんだろうな、と。アルカはそれをどこか他人事のように見ていた。

もう心も身体も動かない。「逃げなければ死ぬ」とわかっていても『もうそれでいい』と思ってしまっている。目の前に魔獣の牙きばが迫る。

（ああ……神さま）

知らず、頬ほおを一筋の涙が流れた。

（この結末は、いくらなんでもあんまりじゃないですか

……?)

そして魔獣の牙はアルカの頭蓋を噛み砕き、彼はその長い一生を終える……はずだった。

「危ない!!」

「ッ!？」

少女の声^{かす}がした。アルカは反射的に身体を仰け反らせた。鼻先を掠めるような距離で魔獣の口が閉じられる。

直後に連続した破裂音のようなものが聞こえて、三匹の魔獣の側面から次々と血が吹き出した。

三匹の魔獣が倒れる。側面にはまるで蜂の巣のように穴が空いている。

——これは今の時代の魔法か？ いや、そんなことよ

り……！）」

アルカは声のした方を見た。

「大丈夫ですかお兄さん!?」

そう言いつつ駆け寄ってきたのは見た感じおそらく十代半ばぐらいの少女だった。

肩にかかるぐらいの明るい赤髪。琥珀色こはくの大きな瞳ひとみが心配そうにアルカの顔を映している。

服はこんな場所にもかかわらず割と軽装。その上から分厚い上着を羽織はっおっている。それに何やら、猫の耳のような突起が付いた帽子。加えてアルカがまったく見たことのない変わった形状の黒い杖を持っていた。

「大丈夫ですか？ 怪我けがしてませんか？」

その少女はもう一度聞いてくる。

「あ、ああ……、うん」

半分呆けながらそう答えると、その子は胸に手を当てて心の底からホツとしたような顔をして「よかった」と呟いた。

その仕草があまりにも自然だったもので、ああ、この子は優しい子なんだな。と、アルカは何の疑いもなく思ってしまった。

「とにかくここは危ないです。ひとまず安全なところまで行きましょう」

その子はそう言って手を差し伸べてくる。アルカは戸惑いながらもその手を掴んで泣いてしまった。ボ

ロボと大粒の涙が溢あふれて止まらない。

「え!? ご、ごめんなさい! 痛かったですか!? やっぱりどこか怪我を!」

少女はオロボロしているがアルカは答えない。いや、答えられない。

—それはアルカにとって千年以上ぶりの人の温ぬくもりだった。ずっとずっと、恋しいと思いつけた温もりだった。

「えーと……もしもし? 大丈夫ですか? 私の声ちやんと聞こえて……わきやつ!」

その少女に抱きついた。みつともないことこの上ないが、まだ幼さの残る少女の胸に顔を埋め、子供のよう

泣きじゃくった。

「あ、あの……？」

「ありがとう……。本当にありがとう……」

戸惑う少女にどうにかその言葉を絞り出す。すると少女は、少しためらいながらもアルカの頭に手を回した。

「よっぽどこわい目にあっただんですね……。大丈夫ですよ。私がついてますから……」

そう言って少女はアルカをギュツと抱きしめてくれた。伝わってくる心臓の鼓動。肌の温もり。

心地よかつた。その温もりが、そして何よりその優しさが心地よかつた。

そうしてようやく、アルカは元の世界に帰ってこれた

気がした。

—だが穏やかな時間は長くは続かなかった。

低い獣の唸り声が聞こえた。音か血の匂いにおに反応したのか、周囲を確認すると十……いや、暗がりの中に浮かぶ眼光を含めればそれをゆうに上回る数の犬の魔獣に囲まれていた。

「……ちよつと失礼しますね」

「え？ わっ!？」

それに気がついた少女の反応は早かった。ひよい、と細身ではあるが大の男であるアルカを少女は軽々と肩に担かつぎ立ち上がった。

素早く周りを見回し、魔獣の包囲が一番薄い場所を即座に割り出すとそちらに向けて走り出す。

魔獣の一匹が少女を迎え討つように飛びかかってくる。だが少女はアルカを担いだままその魔獣の頭を踏みつけて大きく跳躍し、軽々と包囲を飛び越えた。

「フラッシュユグレネードを使います！ 眼と耳を塞いでください！」

「フラ……なんだって？」

言うが早いか、少女は筒のようなものからピンを抜き足元に落とした。

数秒の間。それは凄まじい閃光と高音を辺りに撒き散らす。

「うわあっ!？」

アルカはたまらず悲鳴を上げた。閃光が視界を覆い、音が耳をつんざく。何も見えない。聞こえない。ただ振動で自分が荷物のように運ばれていることだけがわかった。

—数分ほど経ったただらうか。

「もういいかな？ 下ろしますね？」

魔獣の群れから逃げ切ったと判断したのだらう。少女は担いでいたアルカを床に下ろした。

「すいません、さつきは急なことだったので。大丈夫で

すか？ 眼と耳に違和感はありません？」

少女は心配そうな顔でアルカを見ている。まだ眼はチカチカするし耳も聞こえにくかったがアルカはどうにか笑い返した。

「ああ問題ない。ありがとう。あと、こちらこそさつきはごめんね？ その、いろいろと」

一瞬少女はキョトンとした顔をした。アルカの視線を辿り自分の胸元を見る。

……そこはアルカの涙やら鼻水やらでびしょびしょになっっていた。なんだか気恥ずかしい。

「あはは、大丈夫です。気にしてませんから。……ちよつと冷たいですけど」

少女は明るく笑うと大きな眼で、今度は興味深げにアルカを見る。

「それにしてもびっくりしました。生体センサーを見てたら人の反応があつて、誤作動かな？　とも思つたんですけど、念のために来てみたら本当に人がいたんですもん。……いつからこのシヨツピングモールに隠れてたんです？」

「ん……まあ、けっこう前……からかな？」

「――せーたいせんさー？　新しい魔法だろうか？　アルカはそんなことを考える。」

（なんせ千年以上経っているんだ。僕がいない間に魔法もさぞ発展したことだろう。……まあ、それはおいおい

としておこう)

少女に引っ張り上げられ、アルカは立ち上がった。「とにかくいったん落ち着ける場所まで行きましようか。少し行った場所に私がベースキャンプにしている所があるんです。そこまで歩けそうですか？ 無理そうなら私が背負いますけど」

「い、いや、大丈夫だよ」

そうして、少女に先導されながらベースキャンプとやらを指して歩き始める。

歩きながらアルカは必死に頭の中で状況を整理していた。

— 魔樹の封印が解けてしまったのは間違いないだろう。おそらくは相当の被害が出たことも間違いない。……そのことを考えると心が潰れつぶそうになる。自分がもつと頑張っていたことにはならなかった、と。

だがそんな時不意に、誰かの言葉が頭に浮かんだ。『絶望ばかり見るとね。人って前に進めなくなるの。だからさ、あたしは希望だけを見るんだ。どんなに絶望的な状況でだって、希望に向かってゆっくりでも進んでいけば、いつかどこかに辿り着けるかなって』

— 昔、誰かがそう言っていた。

もう顔も名前も思い出せない、けれどもかけがえのない大切な人がそう言っていた。まるでその誰かが自分を

励ましてくれていているようで嬉し^{うれ}かった。

（そうだ。希望はある。少なくとも今、僕の眼の前に生きた女の子がいる）

そう考え、少女の方に視線をやる。するとちようどこちらを振り返った少女と目が合った。少女は柔らかな笑顔顔を浮かべる。

「結構早足で歩いてますけどついてこれてますか？ もう少しゆっくり歩いた方がいいですか？」

そう言っ^て少女はまだ微妙に足元がおぼつかないアルカのことを気にしつつ歩いてくれる。本当に優しい子だな、とアルカは笑った。

「大丈夫だよ」と答えつつ少女の姿を観察する。

おそらく専門の訓練を受けたことがありそうだ。歩き方や周囲の警戒の仕方に多少不慣れながらも洗練されたものを感じる。

服装はずいぶん変わった印象を受けるが、これが今の時代の戦闘服なのだろうか？

：：アルカの国では魔法使いは裏地にルーン文字を刻んだ外套がいたうというのが一般的だったが、身体強化の魔法をメインに使う魔法使いは好んで軽装で戦っていた。

常人の数十倍の速度で動くことになるので服のちよつとした引っ掛かりでも危ないんだとか。：：中には全裸にボディペイントが戦闘服なんて部族もいた。ものすごく眼のやり場に困った。

何はともあれ、先程の動きから考えておそらく彼女の服装もそういう理由だろう。

アルカは自分の考えにうんうんと頷く。うなず

ただ、アルカの知るものと明らかに違うところもある。まずは帽子のてっぺんに猫の耳のような出っ張りが付いているのと、服のお尻しりの上辺りに穴が空いていて、そこから猫の尻尾しっぽのようなものが出ている点だ。

（……ふむ。今の時代はああいうアクセサリを付けるのが流行はやっているのだろうか？ ……いや、さっきの動きからして獣を模すことで身体能力を引き上げるとかそういう魔術的な効果のあるものかも。そうだったなら後学のためにも是非ぜひ詳しく聞いてみたいな。……それに彼女の持っている魔法の

杖)

少女の持っている短めの黒光りする杖に視線をやる。アルカの使っているのは樹齢五千年以上の神木の枝を加工し、柄の部分に長年魔力を込め続けた宝玉をはめ込んだもの。

長さはアルカの背丈くらい。最高品質ではあるが形はわりとオーソドックスな魔法の杖だ。

だが少女のものは何から何まで違う。

長さは地面から腰ぐらいいまで。質感からしておそらくは金属製。持ち手が付いていたり用途のわからないパーツが付いていたりと何やら複雑な形だ。少なくともアルカの知る魔法の杖の形とはかけ離れている。

（ふむふむ。金属はどうにも魔法と相性が悪いから杖には使わないというのが常識だったけど、どうやらその常識は変わったようだ。いやこれは実に喜ばしい。魔法とというのは日進月歩にっしんげっぽ。僕の知る知識もずいぶん時代遅れになっっていることだろう。よし、初心に返ったつもりで勉強し直さないと）

アルカはうんうんと頷く。

（それに僕を助けてくれた時の魔法。おそらくは遠距離攻撃魔法と身体強化魔法。それに閃光魔法かな？ あれはいい。実にいい。何がいいって魔法を使った時に魔力が漏れ出すのを全然感じなかった。つまりそれは使った魔力を完璧かんぺきな効率で魔法に変換できているということだ。

素晴らしすばい)

「あのく、どうかしました？ さっきから私の方ずっと見てますけど……」

「ああ、ごめんごめん。いや、君のその杖いいなと思っ
てね。うん、いいね。とてもいい」

「杖？ ……私のライフル銃のことですか？ お兄さん
はミリタリーとか、こういうの好きなんですか？」

—なにやら不思議そうな顔をされたが、何はともあ
れあの杖はライフル銃という名前の魔法の杖らしい。
（いいなあ。こういう魔術的な加工がされているんだろ
う。きつと僕の思いもつかない素晴らしものに違いな
い。いやあ、いいなあ。ああ、この時代の魔法はどんな

素晴らしい進化を遂げただろう。想像するだけで胸が躍る。まずはあのライフル銃という魔法の杖、解析したい。解体して調べたい。あとで頼んでみようかなーふふふふふふ……)

……正直なところ、アルカはウキウキしだしていた。千年前も天才、英雄、といった触れ込みに加えて本人の穏やかな性格と知識、実力のおかげで多くの人が『彼は完成された素晴らしい魔法使いだ』などと勘違いしていたが、実際の彼は言っ飛ばさず『魔法オタク』であった。

『初めて謁見した国王陛下に喜々として魔法なんたら理

論を語り始めた馬鹿^{ばか}はお前が初めてだ』と昔上官^{あき}に呆れられたことさえある。

しかも、千年以上の封印中における数少ない楽しみが、魔法の探求と魔法がどのような進化を遂げたか想像することだったのだ。もう暴走寸前である。

「んしょつと。こつちですよ〜」

少女は『防火扉』と書かれた金属製の扉を開けて中に入っていた。アルカもそれに続く。

扉を開けた先もまだ通路は続いていたが、通路の向こう側も同じような扉が閉まっており、細長い部屋のよう

になっっている。

「ナビ。私です。こつちに魔獣は来ませんでした？」
『生体反応確認。∴∴∴ファイルーフエンリットと未確認の
人間一人の生体反応を確認。ファイルーフエントが発
見した生存者と判断。問題なし。質問に回答。こちらに
魔獣は来ておらず、周囲に反応も確認されない』
少女が声をかけると物陰からやけに抑揚よくようの少ない男性
の声で返答があつた。

—ファイルーフエンリットというのはこの子の名前だ
ろうか？ そういえばまだお互いに自己紹介もしていな
かつたな。そんなことを考えていたアルカの前にそれは
姿を現した。

（待った。待て待て待て待って!? 何あれ!?）

それの大きさはリングぐらい。人間の眼を模したような形の球体の上に、横向きにした風車が付いたような造形だった。そして、それがアルカの目線ぐらいの高さで浮いていた。

（何だこれは。人間で無いことだけはわかるが何だこれは。材質は僕の知る金属や木材、石材、そのどれとも違う何だこれは。人形魔法とか使い魔の類か何だこれは）
アルカは眼を白黒させつつゴクリと息を呑む^の。

「あの！ あ、あなたは!？」

その球体に思わず敬語で聞いてしまった。

—いや、この対応が正しいはずだ。もしかしたら高

位の精霊が物に宿った姿という可能性もありうる。ならばちやんと敬意を払わなければ。

（もしそうだったらこの女の子の方もとんでもなく高位の魔法使いということになるわけで、どっちにしろいきなり抱きつくとかものすごく失礼なことやらかしたわけだけど。うん、よし、もしそうなら後で謝ろう。土下座して謝ろう。そしてどういう魔法を使ってるか詳しく教えてもらおう）

内心ドキドキワクワクしているアルカに対し、その球体は空中に浮いたままアルカの方に向き直りウィンウィン音を立てる。

『質問に回答。当機は多目的用ナビゲーター型ドローン。』

通称ナビ。現在、ファイルIIフェンリットの支援行動を行っている』

その回答にアルカは歓声を上げたいのを必死に堪えていた。

（すごい……！ 抑揚は少ないけど会話が完璧だ。ドローンというのはよくわからないけど精霊の類ではなさそうだ。そうなるとうやはり人形魔法が使い魔の発展した姿か。素晴らしい。素晴らしい。素晴らしい。素晴らしい。解析したい。解体したい。魔法ここまで進んだかいやっほう！……いや、いや。落ち着け、落ち着くんだ。確かに素晴らしく素晴らしいが今はそれ以上にいろいろとやらなければならぬことがあるはずだ。うん、よし。

まずは自己紹介。これは時代が変わろうと基本だろう)

「あ、そういうえば自己紹介もまだでしたね」
グッドタイミングと言うべきか、少女の方も同じ事を考えたようだ。少女は被っていた帽子を取って頭を下げた。

—その頭にはピンと立った猫のような耳が付いていた。
「私の名前はフィルーフエンリットといいます。よろしくお願いしますね、お兄さん」

「……ふえ？」
アルカは思わずマヌケな声を出してしまった。

「？ あの、どうかしました？」

少女―いや、ファイルは小鳥のように首を傾げる^{かし}。アルカはそんなファイルの頭に付いている猫耳をマジマジと見つめる。

―アクセサリーには見えない。というかピクピク動いている。それに髪で隠れてはつきりとは見えないが、本来耳があるべき場所に耳が見当たらない。

（いや、あとそれにファイルちゃんのお尻の辺りに付いている尻尾、あれもよく見たらなんか動いてない？ え？もしかして生えてる？ え？ほんとに？）

変身系の魔法かとも思ったが魔力を使っている気配はない。普通に、最初から、それが自然のものとしてその猫耳と尻尾はファイルに付いているのだ。

アルカは金魚のように口をパクパクさせている。ファイルはそんなアルカを不思議そうに見ている。

「ええと、ファイルちゃん……で、いいかな。その耳、と、尻尾……本物、かい？」

「え？ はい、そりゃあ本物ですけど」

ファイルは不思議そうな顔をして耳をピコピコ、尻尾をパタパタ動かして見せてくれた。

「そんなに珍しいですか？ デザイナー・チャイルドも最近はだいたいぶ増えたって聞きますけど」

「デザイナー……チャイルド？」

聞いたことが無い単語ではあったが意味はなんとなく語感でわかる。

ーけれども、それはなんて……。

アルカが呆けているとファイルが少ししよぼんとした顔を
をした。

「……お兄さんって『遺伝子操作なんて自然の摂理に反
してる』って言うタイプの人ですか？ だったら……」

「素晴らしい……！」

「ざんね……ええ……？」

ファイルがアルカを見る眼がどんどん不審なものを見る
眼になっけてきている。ただ、今のアルカは自分の感情を
どうにか制御するだけで手一杯だった。いや、あまり制
御できているとも言えない状態だったが。

「す、少し！ 触ってみてもいいかな！」

興奮で声が上ずりそうになるのを辛うじて堪える。

「は、はあ。ちよつと触るぐらいならいいで……ひゃんっ!？」

さっそく触る。迷わず触る。

ピンと立った耳の先端を撫なでてみたり指の腹で擦くつてみたり。ふにふにと柔らかな感触が心地良い。癖くせになりそうだ。

「ふむ、ふむ。ふむ！ 体温がある！ 脈がある！ 間違ちがいなく！ 正真正銘しょうしんしょうめい本物の耳だ！」

「あ、あはは！ や、やめっ！ 待ってくだっ！ そ、その触り方……く、くすぐった……くっ」

「おお、やはりちゃんと神経も通っているのか！ ああ

……君はなんて素晴らしいんだ！」

「ひにゃあっ!？」

なんだかもうたまらなくてアルカはファイルを力いっばい抱きしめた。

「ああ……ああ、素晴らしい！この時代の魔法使いは魔道の最果て、魔法使いの四つの悲願の一つ。『新たな生命の創造』にここまで近づいたのか！」

アルカはもう何か暴走気味にファイルを抱きしめ、耳や尻尾を触りまくっている。ファイルがくすぐったくて悶絶もんぜつしているのだがそれにまるで気がついていない。

「うん！うん！この感じだと錬金術の分野で研究されていたホムンクルスの技術が発展したのかな？とに

かく後進の錬金術師君達グツジョブ！　もうほんとグツジョブ！　ありがとう！　感動した！　ああしかしそうになると参った。僕あんまり錬金術は勉強してなかったからなあ。もうちよつとかじつてたらもつといろわかったらうに。ああくそ『なんか性に合わない』なんてくだらない理由でちゃんと錬金術勉強しなかった過去の自分をぶん殴ってやりたい。本当に惜しいことをした。いや、いやいや！　ここはポジティブに考えよう。知識が無い分先入観に邪魔されなくて勉強できると考えるんだ。ふっふっふ、ようし頑張るぞーいやっほーウゴフウツ!?」

ファイルのボディブローが炸裂さくれつした。

もろに入った。アルカはたまらずその場に崩れ落ちる。見上げるとファイルは顔を真まっ赤かにしてゼーゼーと肩で息をしていた。

「く、くすぐったいからやめてっって言っただじやないですか！ いきなり抱きついて耳も尻尾ももみくちやにするとか何考えてるんですか!？」

「ゲホッゴホッ。ご、ごめんよ。ゴホッ、っ、っつい感極かんきわまっってしまったって……う、ゴホゴホ」

「……あの、ごめんなさい。大丈夫ですか？ 変なところ入りました？ 背中さすりますか？」

そう言って背中をさすってくれる辺り、やっぱいい子である。

背中をさすってもらい、アルカはどうにか回復する。

ただ……やはりさっきの行動はまずかった。

ファイルがさつきより大きくアルカと距離を取っている。

そりや年頃としごろの女の子にいきなり抱きつく男とか警戒して

当然である。

「……えと、お兄さんって何者なんです？ 普通の人と

は服装も雰囲気違いますし。くすぐったくってはつきり

とは聞き取れませんでしたけどさつきなんだか妙なこと

を言っただよな……」

「ああ、そう言えば自己紹介の途中だったね」

そう言いつつアルカはチラリと考える。

——とにかくいろいろと挽回したいが……今の時点で

は詳しい所まで話すのはよした方がいいだろう。

一応二ーベルク家といえは王族とも繋つながりのある有力貴族ではあつたが流石さすがに千年も経つてると残っているかわからない。

アルカ個人も千年前に魔樹を封印した英雄ということになるのだろうが、事情も知らない少女にいきなりそんなことを言つても胡散臭うさんくさく思われるだろう。だからここは無難に……。

「僕の名前はアルカ二ーベルク。ただのしがない魔法使いさ」

「……はい？」

—なんでだろう？

無難に答えたはずなのにものす

ごく困惑されている。

「あ、大丈夫だよ？ 僕は黒魔法使いじゃなくて国公認の白魔法使いだから。つと、もしかしたらその辺の仕組みも変わってるかもしれないか。うん、なんにせよ僕は悪い魔法使いじゃないから安心してね？」

—なんでだろう？ 何故なぜかファイルが苦い顔をして頭を抱えてしまった。

「……ナビ。え〜つと……どうです？」

ファイルが引きつった笑顔を浮かべながらそう聞くとナビがアルカを見ながらワインワインと音を立てて答える。

『回答。対象の心拍数等しんぱくすうにいわゆる冗談うそや嘘を言っている様子は見受けられない。本気で自分のことを魔法使い

と思っている判断。相談を提案。ファイルIIフェンリツト。内密の話につきアルカIIニールクと距離を取ることを推奨』

「……はい。ちよつとここでジツとしててくださいね？
勝手にどこか行っちゃダメですよ？」

まるで小さな子どもに言い聞かせるような口調でアルカにそう言うと、ファイルとナビはアルカから距離をとつてなにやらヒソヒソと話し始めた。

（いったいどうしたんだろうか？ なんだか少し言い争いになつてるようにも……あ、戻ってきた）

「きつとたくさん辛い目にあつてそうなたんですね
……。大丈夫です！ 私はそんなことで見捨てたりしま

せん！」

「なんでだろう？ ファイルがアルカを見る眼が同情と慈愛じあいに満ち溢れたものになってる気がする。

そうしているとナビがファイルの隣に飛んできた。

『確認。ファイルルーフエンリット。彼を連れて行くという判断に間違いはないか。現状、食料等の点から我々にも余裕があるとは……』

「いいんですその分私が頑張りますから！ とにかく見捨てるなんて絶対に駄目です！」

ファイルはナビに叱しかりつけるようにそう言うとアルカに手を差し出す。

「じゃあ……えっと、アルカさん……でいいのかな？」

アルカさんもここで一人で残るよりは私と一緒に来た方がいいですよね？ 私の所もいい環境とは言えないかもですけど、少なくとも他の子もいますし、寂さびしくはないですよ？」

「ん、ああ。そうだね、是非とも君と一緒に行きたい」「はい。じゃあ行きましょつか。……大丈夫です。私が絶対守ってあげますからね」

そう言ってファイルは妙に張り切って荷物をまとめ始める。

（なんだろうか？ ファイルちゃんから感じる優しさは嬉しいんだけど何かあらぬ誤解を受けている気がする）

ーアルカはファイルに連れられ、先程までいたシヨツピングモールという建物を出た。

夜ではあつたが、煌々と照らす月明かりによつて遠くまでよく見える。冷たい空気。吐く息が白い。今の季節は冬だろうか？

……辺りには人つ子一人いない。

中ほどで折れた塔のような建物。焼け落ちた家の残骸。挟まれた道路。破壊された街並み。荒涼とした廃墟を冷たい風が吹き抜けていく。

「それですすね。港の方に私の乗ってきたボートがあるので、それに乗って船に戻るんです」

そう言っつてアルカを先導するファイルは大きなリュックサックを背負つていた。中には保存の効くらしい食べ物
がパンパンに詰まっつている。

道すがら、彼女のこれまでにっつて簡単もらに話して貰つた。

……彼女の住んでいた街は一ヶ月ほど前に魔獣の大群に攻め落とされたらしい。

ファイルは元々軍の訓練生というもので、魔獣に街が襲撃された時に面倒を見ていた子供達をまとめ上げ、避難船に乗つて逃げてきたそうだ。

街を追われた彼女達は海上都市という大きな街を目指して航海を続けてっるらしい。ただその途中、食料が足

りなくなってきたので補給のためにさっきまでアル力達
がいたシヨツピングモールという所まで来たのだとか。

—まだ子供と言ってもいい年齢なのに大変だったろ
う。そのことを思うと封印を守りきれなかった身として
胸が痛む。

(……何はともあれ、船で移動するのはいい手だ)
海や湖は比較的魔獣が少ない。理由は単純に、瘴気は
水の中までは及ば^{およ}ないからだ。

もつとも、水面近くににいる生物は普通に魔獣化する場
合があるし鳥のように陸から飛んでくる場合もあるので
油断はできないが、少なくとも陸路で逃げるよりは遥^{はる}か
に安全だろう。

「……今人類はどうなっているんだい？」

「えっと……すいません。ナビの本体なら私より詳しいと思いますのでそっちに聞いてくれませんか？ 通信は全然安定しないらしいけど少しぐらいは情報が入ってるはずですから……待ってください。静かに」

曲がり角を曲がる直前、ファイルが□に人差し指を当ててアルカに黙るように指示する。

ファイルは息を殺して角を覗き込み、『見て』^{のぞ}というようにアルカにハンドサインを出した。それに従って見るとみると人型の魔獣が道の真ん中をウロウロしていた。両腕が触手のように変化し、それをズルズルと引きずりながら歩き周っている。

「……気づかれる前に倒します。仕留め損ねたらこっちに
来るかもしれないから、心の準備はしといてくださ
い」

ファイルは角を飛び出すとライフル銃と呼んでいた杖を
魔獣に向けた。タタタタツといった連続した破裂音。
魔獣の身体に次々と穴が空いて倒れ伏す。

—今回はアルカも魔力で動体視力を強化してその様
子をじっくり見ることができた。どうやらあのライフル
銃とこのを使った魔法は小さな金属の塊を高速で飛ば
すという魔法らしい。

なるほど、シンプルながら消耗も少なそうだし小型の
魔獣に対して実に効果的だ。アルカは感心したようにし

きりに頷く。

「お見事。やっぱりいい魔法だね」

「あー、はい、うん。魔法、魔法ですね……」

気のない声でフィルはそう答えた。

フィルはライフル銃を油断なく向けながら先程仕留めた人型の魔獣に近づいて行く。そして魔獣が完全に絶命しているようだと確認するとホツとしたように肩を下ろし……哀し^{かな}そうな眼を人型の魔獣に向けた。

「フィルちゃん、どうしたんだい？」

「……この子、私と同じ^{とし}歳ぐらいかなって」

そう言われて、ようやくアルカはその人型の魔獣がロボロボの白いワンピースを着た女の子だということを意

識した。

ファイルは黙禱もくとうを捧たもちげるように静かに眼を閉じる。その姿にギクリとした。

―アルカはかつて耐えられなかった。魔獣と化した人々を手にかける度胸がなかった。

だから切り替えた。それはもうただの敵だ。殺さなきやいけない、と。

けれどもファイルは違う。彼女は魔獣と化した人をまだ人として見ている。……なのに彼女は躊躇ためらわなかった。自分が生きるために、あるいは彼女の帰りを待つ人のために迷うこと無く殺した。それはどれだけ強くて、どれだけ悲しいことだろうか。

「……よし！　行きますようー！」

気持ち切り替えるようにそう言って、ファイルは再び歩きだす。その後ろをついていく。

（この世界は、今どうなっているのだろうか？　そして僕は、これからどうするべきだろうか？）

蒼白あおしろい月を見上げ、アルカは白い息を吐き出した。

「……ん？」

「あれ？　アルカさん、どうかしましたか？」

突然立ち止まったアルカにファイルは足を止めた。アルカは首を傾げつつ辺りを見回す。

「いや、何か……誰かに見られてるような気がして」

「……ナビ、どうですか？」

ファイルが傍らに浮かんでいたナビにそう聞くとナビは
ウインウイン音を立てる。

『否定^{ひてい}。周^{まわ}りにそれらしき反応は確認できない』

「ですって、気のせいですよアルカさん」

「……うん、気のせいって感じでもなかったんだ
けどな……」

アルカはそのまま歩きだす。もう気配は消えた。だが
確かに、誰かの視線を感じたのだ。

まだキヨロキヨロとしているアルカにファイルは苦笑い
した。

「にしても、魔獣あんまりいませんか？ わんさか押し

寄せてきたらどうしようって最初はけっこうビクビクしてたんですけど」

『疑問に回答。この周辺はMP粒子反応が薄いため魔獣の生息数が少ない。とはいえ、風向きなどで急激に反応が変化する場合もある。油断するべきではないだろう』
フィルの呟いた疑問に傍らを飛んでいたナビが答えた。

ーん？ MP粒子？

「さっきナビが言ったMP粒子ってのは瘴気のことかい？」

気になつたので聞いてみた。

アルカの知識では、魔獣は基本的に瘴気の濃い場所を中心に活動する。会話の流れからしてナビの言ったMP

粒子というものと同じものではないかと思っただのだ。

「っ!？」

その言葉にファイルが驚いた顔でアルカの方を振り返った。

—しまった、何かまずい事を言っただろうか……ん？
(なんか……今までとは違ってファイルちゃんの表情が嬉しそうというかなんというか……)

ファイルはアルカに駆け寄るとキラキラした眼でアルカを見上げる。

「もしかしてアルカさんも『魔法戦記』好きなんですか!？」

「ま、魔法戦記……？」

『説明。魔法戦記とは千年以上前に端を発する、人類と魔獣の壮絶な戦いを描いた戦記物語である。魔獣の発生以前まではいわゆるフィクション作品であると考えられていたが、未来において世界規模での魔獣の発生を予言するような内容やその生態、対策等が詳細に記されていて点から事実を元にして書かれた物語である可能性が高いとして注目されている。なお、現在使われる魔獣といった呼称はその物語内で使われているものを引用しており、今で言うMP粒子もその作品内で頻出する瘴気とほぼ同じものであると考えられる』

アルカが戸惑っているとなびが説明してくれた。

—というかもしかしてその魔法戦記とやらは自分の

時代の実話じやなかろうか。

「私！ 魔法戦記大好きなんです！ 大ファンなんです！ アルカさんも!?!」

「あー……まあたぶん、多少は知ってるかな……」

「やったあ！ 今まで話せる相手があんまりいなかったからすごく嬉しいです！ で、アルカさんは原作派ですか？ それとも派生作や二次創作派？ 私はどっちかと言うと原作派ですけどどっちもいけますよ？ どの登場人物が好きですか？ どのエピソードが好きですか？ 好きな国は？ 魔法は？ 魔法戦記のお話ならどんなものでも大丈夫ですよー♪」

ファイルが眼をキラッキラさせながらその魔法戦記とや

らを語り始める。

（あ、これたぶん、魔法のことで語り合える相手を見つけた時の僕と同じ反応だ。で、僕と同じで止まらないやつだ）

そんなことを考えアルカはマシンガントークを始めた
ファイルに苦笑いを浮かべる。

ただ、こういう子供っぽい所を見られるのはなんだか
嬉しかった。

「それですすね！ 主人公の魔法使いがほんっとかっこ
よくて！ ものすっごい天才なんだけどそれを鼻にか
けなくて気さくで、けど最後には……うう、だめです
……、思い出したら泣きそう……それですすね。その主

人公、最後には人類みんなのために魔樹を封印して……あれ？」

ファイルは急に言葉を止め不思議そうな顔でアル力を見上げた。

「そういえばアル力さんの名前とか見た目とか服装とかって全部……」『警戒。生体レーダーにこちらに向かっている魔獣の反応を確認』

突然ナビがファイルの言葉を遮さえぎってそう言った。ファイルは一瞬で表情を引き締める。

「ナビ。詳しくお願いします」

『対象は大型魔獣。十時の方向よりほぼ一直線にこちらに向かっている。こちらは風下であり、どのようはこちら

らの位置を特定したかとは不明。逃走を推しよー』

―地鳴りのような音と、地震のような振動を感じた。

「……逃げるのは無理そうだね」

アルカがそう呟いた次の瞬間。五十メートルほど離れた位置にあった民家らしきものが、それを突き破るよう
に現れた巨大な影によって粉々に吹き飛ばされた。

「な……っ!？」

隣にいたファイルが咄嗟とっさにその巨大な影にライフル銃を
向ける。だがその姿には先程までとは違う怯えおびがあつた。

「なに……あれ……」

ファイルの声が震えている。無理もない。アルカ達の前に
現れたのは正真正銘の化物だ。

姿形としてはとてつもなく筋骨隆々きんこつりゅうりゅうで巨大な猪いのししといったところだ。

ただ、一言で巨大と言っても規模が違う。

体長二十メートル以上……いや、三十メートルはあるだろうか？ 大型の鯨くじら並のサイズだ。前方に突き出た二本の牙は東洋に伝わる刀のように鋭く、地面を踏みしめるたびにわずに僅かに大地が揺れる。

—この種類は知っている。覚えている。

別名、破城猪はじょうしし。

その長く鋭い牙と巨体に見合わない瞬発力による突進は城塞すら一撃で破壊するということから付けられた二つ名だ。

千年前の戦いでこの種の魔獣のせいでどれほどの被害が出たか。英雄と呼ばれたアルカでもこいつと戦うとなるとそれなりの覚悟をしなければいけなかった。

魔獣の眼がギョロリと動きアルカ達の姿を捉とらえた。こちらに向き直り、力を溜ためるかのように地面を踏みならす。

「あ……アルカさん！ 逃げて！」

フィルがアルカの前に立ち、ライフル銃を向けて発砲する。だが明らかに威力が足りない。小さな金属の塊は魔獣の分厚い毛皮に阻はよまれてその皮にめり込むだけで終わる。

魔獣が走り出す。五十メートルあった距離が秒で無く

なる。二本の牙の切っ先はファイルに向いている。

「ひっ……」

ファイルが短い悲鳴を上げる。それでもなおアル力を護まもろうとしている姿にアル力は胸が熱くなるのを感じた。

—ああ、時代は変わっても、人の強さは変わらないでいてくれた。

手を魔獣に向けてかざす。体内の魔力に意識を向け、練り上げる。

—多層魔力障壁、展開。

直後に分厚いガラスにヒビが入るような音がした。

「……え？」

どうやら怖くて眼をつぶっていたらしいファイルが眼を

開ける。

そこには宙に描かれた幾重にも重なった魔法陣と、それによって形成された魔力障壁。そして魔力障壁に牙を突っ込んで動けなくなっている魔獣がいた。

魔獣は牙を抜こうと必死にもがいているが、逃しはしない。アルカは拳こぶしを握り、魔力障壁を締め上げ、牙を掴んで離さない。

「……………え？」

ファイルが今度は困惑しきったような声を上げた。眼をパチクリさせて眼の前に浮かぶ複雑な紋様もんようを描く魔法陣を見つめている。

「ああ、初めて見る魔法だよね。これは僕が考案した多

層魔力障壁と違ってね。どうやら魔力障壁つてのは一枚の強固なものを作り出すよりも薄いものを何層にも重ねて作った方が破られにくいみたいなんだ」
それは奇しくも防弾ガラスと同じ理屈であつた。

『この魔獣と戦うならそれなりの覚悟をしなければいけない』—それは、千年前の彼の強さを基準にした場合だ。

……千年間、己おのれの魔法を鍛え、磨き上げた。

『いつか封印は解けてしまう』

千年もの間、心はその事実を否定し続けていたが、頭ではわかつていた。

この世に永遠などというものはない。それは神様です

らも例外ではない。自分の心が折れるか、はたまた他の要因か。いずれにせよ、いつか封印は解けてしまっただろうと、少なくとも頭では理解していたのだ。

だから、鍛え上げない道理はなかった。いつか来てしまっその時に後悔しないために。今度こそ大切なものを護るために。

「まあ、薄いとはいえ複数の魔法の同時発動ってことになるから普通の魔力障壁と比べて難易度が跳ね上がるんだけど、そこは頑張っつて練習したさ。で、頑張っつて練習して三十二層まで重ねられるようになった」

「……え？ なん……え？ ええ？」
ファイルが何やらオロオロしている。

（僕の魔法を見てびっくりしている感じだ。ふむ、この多層魔力障壁の素晴らしさと難しさに気づいてくれたかな？ ……ちよつと嬉しい）

アルカはついニヤニヤと□元に笑みを浮かべてしまう。こうして新しい魔法を披露して他の人を驚かせるのは彼の最大の楽しみの一つだった。千年ぶりでもそれは変わらないかった。

「さてせっかくだ。こういう大型の魔獣への攻撃に関してご教授しよう。……さつきファイルちゃんはそのライフル銃って杖で金属の塊を飛ばす魔法を使ってたよね？ 見たところあのライフル銃は単一の魔法の使用に特化したタイプなのかな？ うん、確かにあれは小型の魔獣に

対しては効率も良くとても有効だ。是非とも後で僕にも教えて欲しい。……けど、大型の魔獣の皮は固くて分厚いし、それにちよつとした傷はすぐに再生してしまうからね。ああいう細かい攻撃はあまり有効ではないんだ」まるで学校の先生のような口調でアルカは説明する。そんなアルカにファイルは眼を白黒させていた。

「やるなら……そうだな。貫通力の高い一撃で核を撃ち抜くのが一番スマートで理想だけど、もうちよつと難易度を下げると体内から焼いてしまうのなんか有効かな？ 連中は意外と高熱によるダメージには弱いんだ。うん、少しやってみようか」

アルカはそう言うと自身の魔力に意識を向け直した。

― 炉に火を入れる。

頭に思い描くのは鍛冶場。肌を炙るあぶような熱。空気を送られ燃え盛る炎。鉄を鍛える鎚つちの音。鉄をも溶かす溶鉱炉。

それは幻想であり、そして幻想であるがゆえに生み出せるものには限りはない。

（熱く、溶かせ、削り出せ。鋼の剣こるぎ。形作り、打ち鍛える。硬く、重く、鋭く。それに炎を。熱を。熱く、熱く、熱く。岩をも溶かす程に熱く。燃え盛る剣。炎の魔剣まけん）

イメージする。イメージする。アルカはコツンと、地面を杖の先端で叩たたいた。それをきっかけとして周囲に魔法陣を展開。イメージしたものを一気に現実世界に反映

させる。

「え？ え？ ……ええええええええええ!?」

次の瞬間、炎が視界を覆ったかと思うと百本以上もの赤熱した魔剣がアルカの周囲に展開されていた。

（……フィルちゃんがなんか面白おもしろい声を上げてるけど、こういう大魔法を見るのは初めてなのかな？）

魔獣に杖を向ける。赤熱した魔剣が暴風雨のように魔獣に殺到する。剣の切っ先が次々に分厚い毛皮を突き破り、魔獣の体内に岩をも溶かす熱を注そそぎ込む。

『アアアアアアアア!!』

魔獣が断末魔の悲鳴を上げる。眼や口から煙が吹き出し、山のような巨体が地響きを立てて地面に倒れ伏す。

しばらくは地面をのたうち回っていたが少しするとそれもなくなくなった。肉の焼ける匂いが辺りに広がる。近寄って念のため杖でつついてみるが復活する気配はない。「うん、こんな感じかな？ 久しぶりなんで少し張り切ってしまったね。……大丈夫かいファイルちゃん？」
ファイルは口をパクパクさせながらアルカと動かなくなつた魔獣を交互に見ている。

「え、えつと……ナ、ナビ？」

助けを求めようような眼でファイルはナビを見た。

ナビは何かウインウイン音を立てていたが、しばらくするとビーと耳障りな音を上げた。

『理解不能。解析結果、意味不明。当機の観測機器に深

刻な不具合が生じている可能性が高いため判断をファイル
|| フェンリットに一任する』

「えええ……えくと……えくと……」

ファイルは困ったような顔で言葉を探している。

「アルカさんって……その……何者、ですか？」

（何者ってちよつと前に名乗ったけど……。いやあの時はただのしがない魔法使いって名乗ったし。あれだけの大魔法を使える人はこの時代でもあんまりいないのかな？ だとするとただのしがない魔法使いは無理があるか、よし）

アルカはそう考え、あらためて名乗ることにした。

「僕の名前はアルカ＝ニールク」

そう言っつてニコリと笑う。

「ちよつと凄^{すご}めの魔法使いさ」

十

アルカ達のいる場所より遥か上空。地球衛星軌道上。

青く美しい地球を望めるその場所に“それ”はいた。

外見としては巨大な液体金属……水銀のようなものが球体となり、宇宙空間を漂っていると表現するのが適切だろう。

だが、“それ”には眼があつた。その眼には明らか

意思が宿っていた。

憎悪ぞうお、歓喜かんき、憤怒ふんど、恐怖、畏敬いけい、そのどれともつかない、

あるいはそれら全ての感情すべが入り交じった視線が、地上に向けて注がれている。

ゴボゴボと表面を泡立たせ、“それ”は□を作り出し、
□端くちはを歪めて笑ってみせた。

『——見つけた』

二章 『新しい願い』

—ああ、神さま。こんなの酷むごすぎる。いくらなんでも、
こんなのあんまりだ。

「え？ 待って？ 冗談だよね？ え？ 魔法無いの？
無いの魔法？ え？ 本当に？」

「は、はあ。私も魔法って本とか物語の中のものって思
ってたからもものすごくびっくりしたんですけど……ほ、
ホントにアルカさんって魔法使い……なんですよね？」

「もちろん。……いや魔法がないなんて冗談だよね？
だってこのモーターボートっていうやつ、風魔法か何か
は知らないけど魔法を使ってるじゃないか」

「いえ、これは科学……でいいのかな？　そういうのを
使ってます……」

「科学？　それはどういう魔法なんだい？」

「いや、ですから魔法じゃなくてえ……」

ファイルはそう言って頭を抱えてしまった。

アルカとファイル、それにナビはモーターボートという
小舟に乗って沖に停めるといふ船に向かっていた。

―海の上を跳ねるように自ら走る小舟。これが魔法
でなくて何なのか。ちなみに操舵の方はナビが舟と……

ゆーえすびーけーぶる？ とにかくそんな名前の紐ひもで舟と繋つながることでやっているらしい。

「すごいなナビ。うん。やっぱり魔法だよねこれ」

魔法じゃないというのをあくまで認めようとしなないアルカに、ファイルは困ったような顔でナビと視線を交わす。

「えーと……。ナビ、どうしましょう？」

『このような事態は前例が無いため、ファイル＆フェンリツトに判断を一任する』

「……もしかしてナビ。面倒だからって私に丸投げしてませんか？」

『濡ぬれ衣ぎぬである』

「んーと、んーと……。それじゃあナビ。科学の歴史と

か、そういうのって出せます?」

『可能である』

ナビはそう言うと言いつとワインワイン音を立て、空中に資料らしきものを映し出す。——いややっぱり魔法だよねこれ?

「わかります? 私も学校で習ったりしたので多少は説明できますけど」

「いや、うん。大丈夫。錬金術の発展したものとみただから詳しいところまではわからないけどなんとなくはわかる。……けど、これ……」

アルカは映し出された文章を一気に読んでいく。

——現代の文明はやはり錬金術の発展したものをベ

スにしているようだ。ただ……違う。アルカの知る錬金術と違い過ぎる。

錬金術、と魔法とは区別して呼びはするが、錬金術も魔法の親戚のようなものだ。

両者の違いは方法の違い。

自らの力をひたすら鍛え、神の奇跡を目指したのが魔法使い。

世界の理をことわり解き明かし、神の奇跡を自分達の手の届く所まで引き下げようとしたのが錬金術師。

とは言え『神の奇跡を再現する』という最終目標は同じだった。

だがこの科学というものは違う。世界の理を解き明か

そうとすると、この点は錬金術と同じだが、おそらくこちらには『世界の理を解き明かし尽くして自在に操る』あやつことが目的だ。そもそも魔力の魔の字も見当たらない。

「……ちなみに再確認だけど、魔法使って本当に見たこと無い？」

「はい。物語とか昔話ではよく見るんですけど……ナビ、そういうのも表示できますか？」

ファイルにそう言われ、ナビは今度は『魔女が登場する代表的な昔話である』と言って王女の美しさに嫉妬しつとした魔女が王女に毒リンゴを食べさせるといった内容の絵本を映し出した。

「あれ？ この魔女さん、たぶん顔見知りだ」

「マジですか!？」

ファイルがまた眼を白黒させているがアルカはもうそれどころではなかった。

「……無いの？ 魔法無いの？ ホントに？」

「あの、大丈夫ですかアルカさん？ なんだかもう泣きそうな顔してますけど」

「は、は、は、は。ダイジヨーブダイジヨーブ」

—魔法が失伝したというのは、—応理解はできる。千年前の戦いで主だった魔法使いはみんな死んでしまった。親のどちらかが魔法使いでなければ魔法の素質を持った子供はなかなか産まれない上、習得には時間がか

かる。

復興で忙しかつただろうしおそらく魔法というものを維持できなくなつたのだらう。そして、知識さえあれば誰だれでも使えるこの科学というものに文明がシフトしていったと。

「うん、理解はできる。理解はできるよ？ ……ただ理解と納得つていうのはまた全然違う問題であつて…。うわあああああん!! 神さまこんなにあんまりだあああ!!」

「げ、元気出してください。あ、ほら、船が近づいてきましたよ」

「ふね……船？」

ファイルの言う船の全容が見えてきた。

……巨大だった。実際は少し前から見えていたのだが上に建物らしきものが見えたので小島か何かと思っただけだ。

「いや待って大きすぎない？ というかなんかあの船、材質が木じゃなさそうな感じなんだけどもしかして金属？ なんでもんなのが浮いてるの？ それに帆やマストも見当たらないしどうやって動くの？ あれ？ やっぱ魔法使ってない？ ねえ魔法使ってない？ 魔法」

「ナ、ナビ……。アルカさんの眼がなんだか怖いです

……」

『推奨。』
とりあえず放置』

アルカ達の乗った小舟はその巨大な船に近づいていく。近くで見るとあらためてその大きさがわかる。横だけでなく高さも相当あつて近くで見上げるとてっぺんが見えない。材質はやはり金属製だろうか。

そして……船の後部の方を見てギョツとした。船の後部の上半分ぐらいが巨大な爪つめで引き裂かれたように潰つぶれている。

歪いびつな形に抉えぐられ中身を晒さらしている姿は肋骨ろっこつが剥むき出しになつた人間の姿を彷彿ほうふつとさせた。

「……この船を使っているのかい？」

『肯定。現在、フィルーフエンリット以下十五名の避難

船として運用している。なお、本来の乗組員が全員死亡したことに加え、外部との連絡も繋がらないことから、緊急避難的措置として船の運行は当機が行い。乗員の中では最年長かつ軍事教育の経験のあるフィル・フエンリツトを臨時の船長としている』

「最……年長？」

ナビの言葉にフィルを見る。

——どう見ても十代半ばの、まだ幼いと言ってもいい女の子だ。この子が、最年長？

アルカとナビの会話を聞いて何か思い出したのか、フィルは暗い顔をして視線を落とした。これは想像していたより深刻な状況かもしれない。

『ボートを回収する。水飛沫しづみに注意』

ナビがそう警告すると音を立てて船の横腹がスライドして開く。アルカ達に乗っている小舟はその中に入っていく。なんとなく怪物の口の中に飛び込む気分だった。そして……。

「せーの！」「ファイルおねえちゃんおかえりー!!」「子供達の元気な声が出迎えた。

中は船着き場のようになっていて、そこにはすでに何人かの子供達が待ち構えていた。そうして見ている間にも他の場所にいたであろう子供達がどんどん集まってくる。

「おかえりー」「怪我けがなかつた?」「何持って帰ってきた

のー?」

ー思ったたより元気そうだなこの子達。

小舟を船着き場に横付けし、ファイルが小舟から降りるとあつという間に子供達が取り囲んできた。その表情はみな本当に嬉し^{うれ}そうだ。

なにせ魔獣が徘徊^{はいかい}する場所へ行ってきたのだ。待つている子供達も不安だったろう。笑顔で子供達の出迎えを受けるファイルを見てアルカも表情を緩^{ゆる}める。

「ねえお姉ちゃん。こっちのお兄ちゃんは?」

と、今度は興味の対象がアルカに向いた。

「この人はアルカ＝ニールクさん。なんと! 本物の魔法使いさんです!」

「……魔法使い？」

……今の紹介はまずいんじゃないだろうか。

ファイルの紹介に子供達の中でも素直そうな年少の子達はキラキラした眼でアルカを見てくれるが、それなりに大きな子達は「ああ、そういう設定ね」とでも言いながらたげな眼でアルカを見ている。

ファイルもそれに気がついたのか少し慌ててアルカの袖^{そで}をクイクイ引っ張って小声で話しかけてきた。

「あの、アルカさん。魔法、魔法見せてあげてくれませんか？ そうすればみんな納得すると思いますし」

「あゝ……それは、ごめん」

アルカはそう言ってポリポリ頬^{ほお}を搔^かく。

「魔法っていうのは元々は『神さまからいただいた魔力を使つて、できるようになったことを神さまにお見せする』っていうのが始まりでね。『神さまにお見せするための魔法を見世物みせものにするとは何事だ』ってことで、言い方は悪いかもしれないけど見世物として使うことは固く禁じられているんだ」

アルカがそう言うとフィルの猫耳がしょぼんと下を向いた。

「そうなんですか……。すみません。そつとは知らず……」

「いやいや、気にしないで。こつちこそごめんね」
フィルの頭を撫なでる。こつち素直に引き下がってく

れる辺り本当にいい子だと思う。

……本音を言えばアルカとしても是非^{ぜひ}子供達に魔法を見せてあげたいのだが、そこは最低限のけじめというやつだ。

「僕の名前はアルカニールク。シヨツピングモール……だったかな？　そこでフィルちゃんに助けられたんだ。で、フィルちゃん、早速で悪いけどここに来る前に言っただけのナビの本体っていうのにいろいと話を聞きたいんだけど」

「あ、はい。みんなごめんね。お姉ちゃんちよつとやることがあるから」

子供達の相手をしたいたいという気持ちもあつたが今はそ

ちらが優先だ。魔獣が復活して、世界は今どうなっているのか。……そして、自分はこれからどうするのか。「それじゃアルカさん、オペレーションルームに行きましよう」

ファイルとナビに連れられ、オペレーションルームという所に来た。

何と言うか、面妖な部屋だ。暗い球状の部屋で、まるで夜空の星々のように壁には幾つもの光が灯り絶え間なく明滅を繰り返している。

そして部屋の中央にはナビをそのまま巨大にしたよう

な、人の背丈程もある大きな球体が浮いていてそこに向かつて橋のような通路が伸びていた。

『ようこそ、アルカニールベルク』

部屋の中央に浮いていた球体がそう声を発した。

「その声……ナビ？」

『肯定。すでに貴殿きでんとの経緯は子機よりアップロードされ把握済みである』

「……子機？ アップロード？」

『アルカニールベルクが理解しやすい言葉を思案中。』

……貴殿が出会った小さなナビは当機の分身のようなものであり、その分身が得た情報を当機も共有した。ゆえに、貴殿とフィルーフエンリットのここまでの経緯は把

握している』

アルカは心の中で小さく感嘆の声を上げる。サラッとやっではいるがこれは相当高度なことだろう。

「じゃあ、ナビ。今の世界がどうなっているのかを聞かせて欲しい」

『……………』

「ナビ？　どうかしました？」

反応が遅いのを不審に思ったのか、隣にいたファイルがどうかしたのかと尋ねてみる。

『問題なし。ファイルリフト。周囲に映像を表示する。少し下がってもらいたい』

「あ、はい」

ファイルが離れるとアルカの周りの空間に映像が現れた。
『約十八年前。世界各地でMP粒子……貴殿に合わせる
ならば瘴気しょうきと、魔獣と呼ばれる敵性存在が発生した』
「十八年!？」

自分が目覚めたのと封印が解けたのにはずいぶん時間
差があるようだとは思っていたが、十八年は予想外だっ
た。

……何より驚いたのは、人類が十八年経たつても滅びて
いないという点だ。

魔法も無しに魔獣と十八年も戦い続けているなど魔法
使いであるアルカにとって信じがたいことであつた。
『瘴気の影響により通信がまともに機能しなくなつたの

で断片的な情報しか入って来ないものの、これまで人類は深刻な被害を受けた』

アルカの周りの映像に破壊の限りを尽くす魔獣の群れや破壊された街並み、地図に表示される被害範囲。犠牲者の^{ぎせいしや}リストが表示されていく。

一千年前のことが一瞬フラッシュバックして軽い吐き気がした。その間もナビのこれまでの出来事^{できごと}の説明等が進んでいく。

『そして、これは約一ヶ月前。ファイルフェンリットの故郷にて撮影した記録映像である』

そう前置きしてナビは一つの映像を映し出した。

そこにはファイルが映っていた。どこかの建物の中。音

声はないが動きから察するにナビと何か話しているの
だろうか？ 楽しそうに笑う様子が映っている。
だが映像に映るファイルが急にビクリと硬直した。近く
の壁にあっただランプのようなものが赤く明滅を繰り返し
ている。

そこから目まぐるしく場面が変わる。映し出されたの
は空を黒く埋め尽くすような昆虫型の魔獣の群れが街に
雨のように降り注ぐ光景だった。

『大規模な魔獣の群れの攻撃により街は壊滅。その後、
ファイルーフエンリットの父であるレオンーフエンリット
の指揮の元、百十三名の生存者がこの船で脱出した。し
かし、密かに強力な魔獣が船に入り込んでいた』

再び画像が切り替わる。そこに映っていたのは背中から六本の虫の脚のような触手を生やした人間の男性型の魔獣。近くで見ているファイルのことを気遣ってかその映像はすぐに閉じられた。

『最後には、船長であるレオン・フエンリットが子供達をシエルターに避難させ、決死の特攻により事態は収束した。しかし生存者はその子供達のみとなった。それからにはファイル・フエンリットを指揮官とし、当機はそのサポートと船の運行という形で現在に至る』

―ズキズキと心が痛む。こんなことを考えても無駄むだだということにはわかっている。それでも、今も自分が封

印を護^{まも}ることができていたなら彼等^{かれら}はこんな被害を受け
ることはなかつただろう。そう思うと、心がひび割れそ
うになる。

そんなアルカを観察するように、ナビは大きなレンズ
にアルカを映していた。

『……さて、アルカ＝ニールク。当機からも貴殿に質
問がある』

そう言った途端、壁からファイルが持っているライフル
銃のようなものが幾つも飛び出してきた。照準を合わせ
る為であろう赤い光がアルカの額と胸に当てられる。

「ナビ！ 何を!？」

ファイルが抗議の声を上げたがアルカはそれを手で制し

た。

—この展開は予想していたし、必要なことだ。

『アルカ=ニールク。貴殿は何者か。貴殿が魔法と呼ぶあの能力のこともそうであるし、アルカ=ニールクという名前及び貴殿の身体およデータに一致する人間は当機に記録された地球人類のリストに存在しない。当機は現在、貴殿が新種の魔獣ではないかという懸念けねんさえ抱いている。納得のいく回答を求む』

「ああ。……ただ、その回答はフィルちゃんに言わせて欲しいんだけど、いいかな？」

『理由は？』

「……僕は根がどうしようもなく臆病おくびょうみたいでね。彼女が

無邪氣むじやきに笑いかけてくれるのが嬉しくてつい先延ばしにしてしまった。これは、もっと早くに話さなきゃいけないことだった」
——手が震えるのを感じる。自分はいっつかからこんな臆病おくびょうになつたのか。

怖い。あれだけ渴望かつぼうしていた人との繋がりが切れてしまふのが怖くてたまらない。許されるなら何もかも秘密にしていたい。

……だが、それを自分に許すことだけはできない。それをしてしまえばもう、自分は本当に誰にも顔向けできない人間になつてしまふ。

杖つえをそっと床に置いて一歩下がる。

「僕が何か妙なことをしようとしたなら遠慮なく攻撃し

てくれて構わない。その時は一切抵抗いっさいしないと神に誓おう。……どうかな？」

『……バイタルチェック完了。緊張や恐怖は見られるもののこちらを謀ろうとする気配はなし。……承認した』
「ありがとう」と一言言って、少し離れた場所にいたファイルに手招きする。ファイルは少し戸惑とまどいながらアルカの前に来る。アルカはその場に膝ひざをつき、ファイルと目線を合わせた。

「ファイルちゃん、僕はね……」

—怖い、怖い、怖い。

思い出してしまった温ぬくもりを手放すことはこんなにも怖いのか。彼女がこれまで見せてくれていた無邪気な笑

顔が憎しみに変わるのを想像すると胸が張り裂けそうになる。

「……世界がこうなってしまったのは、僕のせいなんだ」

「アルカ……さん？」

そこからアルカは話し始めた。

彼女の知る魔法戦記という物語が事実であること。千年前の戦い、そして結末。アルカの知ること、思い出せること^{すべて}話した。

「これで全部だよ。……すまない。何度謝ったところで

慰めにもならないだろうけど、僕が封印を護れなかったせいで君達に辛い思いをさせてしまった」
そうして話を終わると……ファイルは泣いていた。ポロポロと大粒の涙を流し、嗚咽おえつを堪えている。

—ああ、やっぱり、駄目だ。

心が捻ねじれるような感覚だった。今すぐ逃げ出したいと思った。

だけど、逃げてはいけない。封印を護れなかった者の責任として向き合わないといけない。

彼女が自分を撃つのならそれも甘んじて受けようと思っていた。思っていたのに……ファイルはアル力を抱きしめてきた。

「……え？」

すぐには思考が追いつかなかった。ファイルはギュツとアルカを抱きしめている。

「寂^{さび}しかったですよね……長い間……ずっと、ずっと一人で……」

「ファイル……ちゃん」

少ししてファイルはアルカから身体を離れた。

「私は魔法戦記という物語が好きで、小さい時から何度も何度も読んでいました」

ファイルは涙を拭^{ぬぐ}いながらそう言った。

「一番大好きな登場人物は主人公のアルカIIニールクさんです。ものすごい天才なんですけど優しくて、みんな

なを護るために必死に戦つて。最後には……世界を救つてくれました」

ファイルの大きな眼がアル力を映す。

「なんででしょう？ お父さんや他の人達には『それは作り話だ』って何度も言われていたのに、なぜか私はずっと、そのお話が本当にあつたことなんだって信じて……」

そう言うとファイルは花が咲くように笑つた。

「ずっとお礼が言いたかつたんです。今までずっと世界を護っていてくれたこと。あなたがいなければきっと、私は生まれてくることもできませんでした。だから本当に……本当にありがとうございますとうございしました」

—それは、言っ飛ばしてしまえば子供の言うことなのだろう。
きつと多くの人はアルカを許しはしない。アルカに
憎悪ぞうおを向ける人は必ずいる。

だけど、それでも、彼は救われた。この瞬間、彼のこ
れまでの戦いは全て報むくわれた。

たった一人でも『ありがとう』と言っけてくれる人がい
る。あの孤独な戦いに感謝してくれる人がいる。それが
こんなにも嬉しいことだなんて思わなかった。それだけ
で立っていられる。いくらでも戦える。

「……神の御名みなの下もとに、魔法使いアルカ＝ニールクは
ここに誓う」

「本当は泣いて彼女を抱きしめたい気分だったがそれは堪えた。もう手遅れな気もするが、彼女の前では格好かつこうをつけたいと思った。彼女が憧あこがれてくれるようなヒールでいたいと思った。だから姿勢を正して、かつて王に忠誠を誓った時と同じような言葉を紡つむぐ。

「この身はこれより御身おんみの敵を打ち倒す剣つるぎであり、御身を護る盾たてである。……僕は君と、君の大切な人達を護るために力の全てを振るおう。あらゆる不安や恐怖を遠ざけるために全力を尽くすと誓おう」

「えと……あの……？」

ファイルはキョトンとした顔をしていた。そんなファイルにアルカは笑いかける。

「所信表明みたいなものだよ。どうか受けてくれないな？」

「は、はい。それじゃあお願いします」

ファイルはそう言っていねいて丁寧に頭を下げた。アルカは立ち上がると再びナビの方を振り返る。

「と、勝手に宣せんせい誓しちやっただけかどうか？

僕としては信用してくれと言う他ないんだけど」

『∴∴先程のファイルⅡフェンリットとの会話中、バイタルのチェックをしていたものの嘘うそについている気配はなかった。また、貴殿のこれまでの経緯については信じがたいという他ないが、貴殿のこれまでの行動や貴殿が魔法と呼ぶ能力、その他諸々もろもろの状況証拠に矛盾むじゆんは無く、貴

殿を信用するのが今のところ妥当だとうであると判断する』
ナビがそう言うところアルカを狙ねらっていた銃が壁の中に引
っ込んでいく。

『気分を害したのであれば謝罪する。確認しないわけに
はいかなかった。先程の貴殿の宣誓については問題ない。
むしろ、協力関係を結べる相手と判断したのならこちら
から依頼しようと考えていた』
ナビはそう言いながら今度はアルカの前に半透明の地
球儀を映し出す。

その地球儀には船の現在位置と目的地。そして地球儀
の大半をMP粒子帯と書かれた赤く塗りつぶされた地域
が覆おおっている。

『我々の目的は最も近くにある海上都市まで避難することである。だが、近くとは言ってもMP粒子帯や危険な海域を避けていく関係上、到着までには順調にいつても一ヶ月以上かかるだろう。それまでには何度か先程のよう^うに危険を冒して上陸し、食料等を補給する必要があることに加え、どうしてもMP粒子帯を横切らなければなら^らない海域もある。現状のままでは全員無事に目的地に到着でき^きる可能性は非常に低いと言わざるを得ない』

地球儀が消え、今度はアルカが大型の魔獣を倒した時の姿が映し出される。

『魔法というもの^{もの}に関しては当機の判断能力を大きく越えて^えているが、貴殿が大型魔獣を一蹴^{いっしゅう}したのは事実である。

その戦闘能力が加わるのであれば目的の達成確率は大幅に上がるだろう。……あらためて確認する。アルカIIレベルク。貴殿は我々に協力し、乗員を護るためにその力を振るう。その認識で間違いはないだろうか？』

「ああ、もちろん」

『承認した。貴殿の協力に感謝す……』

「……ん？ ナビ、どうかしたのかい？」

少し間を置いてビー！ ビー！ という耳障りな警報音が鳴り始めた。壁に付けられたランプが赤く明滅を繰り返し、部屋全体が赤い光に包まれる。

『緊急事態発生。緊急事態発生。超大型の魔獣が接近中。非戦闘員は速やかに指定のシエルターに避難せよ。繰り

返すー』

船内のあちこちからそんな声が聞こえる。ファイルが慌ててナビの所に駆け寄った。

「ナ、ナビ！ まさかこれって……」

『状況から推察するに、先程上陸した事により敵性体に発見されたと思われる』

ナビが冷静にそう告げる。

ーおそろくはさっつき上陸した時に眼をつけられ、追跡されたかボートの進む方向からこの船の位置を割り出したのだらう。

『敵超大型魔獣。撮影に成功。映像として表示』

ナビがそう言うのと魔獣の映像が表示される。

—おそろくは鯨くじらか何かが魔獣化したのだろう。それは生物と呼ぶにはあまりにも巨大で、山か島が動き出しこの船を追いかけているかのようだった。

「こ、こんなもの……どうしたら……」

フィルの表情が青ざめていた。身体も震えている。

「大丈夫。心配しなくていい」

だからこそアルカは笑った。—ああ、あえて言うおう。ちようどいいと。

「ナビ。さつき僕にやったみたいはこの船に乗る子供達に僕の戦う姿を見せたりはできるかな？」

『その意図は？』

ナビにそう問われてアルカは苦い笑みを浮かべた。

「……恐ろしい程に強大な力が自分達の側にある。それで安心できるのは時が移ろうと変わらないと思ってるんだけどどうかな？」

『勝算は？』

「まるで問題にならない」

アルカがニヤリと笑いながらそう答えるとナビの子機がアルカに付き従うように後方で静止した。

『要請^{ようせい}を承認。子機による撮影を行う。その子機が見た光景を他の子供達も見ることになるのでそのつもりで行動して欲しい』

「ああ、わかった」

「あの……アルカさん……ひゃっ!？」

ファイルが不安そうな顔で自分の顔を見上げていたのでその頭をくしゃくしゃと撫でた。柔らかな髪の毛の感触が心地こころ良い。

「何も心配することはないよ。ファイルちゃん、君が憧れてくれた僕のカ、どうか見ていて欲しい」

外に出てアルカは夜空を見上げた。明るいい月明かり。乾いた冷たい風が少し辛い。

(……まただ)

少し前に感じたのと同じ、一瞬何者かの視線を感じた。だが気配はすぐに消えてしまう。

気にはなつたが詮索せんさくしている時間は無い。アル力は足早に後部甲板へと向かった。

後部甲板に到着すると暗い海の向こうに件の魔獣くだんの姿が見えた。

なるほど、大きい。まだずいぶん遠くにいるはずなのにその姿がはつきりと見て取れる。

船を丸齧まるかじりできそうなほど巨大な鯨。

全長は二百メートルを軽く超えているのではなかろうか。その頭部の前面には巨大な眼が一つ、暗い大海原の中で妖あやしく輝いている。

(さて、と……)

準備にかかる。流石さすがにあれは普通の魔法では殺しきれ

ない。かといつて苦戦は論外だ。それでは子供達が不安がる。

チラリと横を見るとナビの子機と言うやつが大きなレンズの眼にアルカを映していた。

—ならば、やることは一つだ。

アルカは静かに眼を閉じた。

（ああ、巨大な敵というのはある意味都合つうごうがいい。……細かい狙いも気にせず、全力でぶっ放せる）

—魔法陣、展開。

天に向けて杖を掲げ、その杖を中心に円形の魔法陣を展開する。サイズは特大。今乗っているこの船をすっぽり覆ってしまえる程だ。

ー回せ、回せ、回せ、回せ。魔法陣の内縁ないえんに沿って球体状の魔力を走らせる。外には出さず、魔法陣の中で走らせ続け延々と加速させていく。

『∴∴データ解析。構造は粒子加速器に近いものと推測。アルカ||ニールク、これは？』

「その□ぶりからすると科学にもこれと似たような物があるのかい？ これは昔、物をひたすら加速し続けたらどうなるかを試してみた時に思いついた魔法でね」ナビにそう話しかけつつ魔法陣の大きさを縮小していく。大きさが縮むと共に中で走らせていた魔力球の回転数も上がっていく。

「溜ために時間がかかる上にもものすごく魔力を喰くうんでお

世辞にも効率がいい魔法とは言えないんだけど、威力だけはものすごくてね。ああいうデカブツ相手ならおあつらえ向きだろう」

魔獣が近づいてくる。遠くに見えていた山のような姿は今では見上げる程の距離まで来ている。

大きく口を開けた。海水が巻き上げられ、まるで滝のように落ちてくる。あれだけ大きな口ならばこの船の後ろ半分はひと齧りでいけるだろう。

それに合わせてアルカも限界まで魔法陣を縮小する。

船を囲う程だった魔法陣の大きさは今や杖の頂部に付いた宝石の周囲一メートルほどまで狭せばまっていた。中を走り続ける魔力球が魔法陣の中で激しく稲光いなびかりを放出して

いる。

『……内部の球体の速度が当機の観測機器の測定限界を突破。予測値ではあるが対象のエネルギーがいさ……制止要請！ 制止せよアルカIIレベルク！ そんなものを放てば……！』

「あ、そうだ。ナビ。子供達に揺れるから気をつけてって言っといてくれるかな？」

杖を魔獣に向ける。同時に船と自分達を最大まで重ねた多層魔力障壁で保護。そして限界まで加速させていた魔力球を魔獣に向けて解き放った。

閃光^{せんこう}が走った。ほんの僅^{わず}かに遅れて至近距離に雷が落

ちたかのような轟音ごうおんと破局的な衝撃波が周囲を襲った。魔獣の頭部が消し飛ぶ、船を覆う魔力障壁に大きく亀裂が入る。船が前方に大きく傾き、反動で数十メートル前進する。

—まずい、やりすぎた。

船が大きく揺れている。少し遅れて魔獣の肉片や血が滝のように降り注いできて、慌てて魔力障壁を傘かさのように展開してそれを防ぐ。船の後部が衝撃でベッコベッコにへこんでしまった。

—ああ、これ……後始末が大変なやつだ。

ただ流石にあの一撃には耐えられなかったらしい。頭部を失った魔獣は白波を立てて海に沈んでいく。

「ナビ、無事かい？」

アルカは近くで魔獣の肉片に埋もれていたナビを拾い上げた。

『…：要請。アルカーニールク。今後このようなことをする場合は当機に一言相談するよう要請する。魔獣より先に貴殿に船を沈められかねない』

「はは、ごめんごめん。ところで、さっきの光景は他の子供達も見ることができたのかな？」

『問題なし。中継は滞りなく完了している』

「そうか。ならもうひとつの目的も達成できたね」

無事に自分の力を示すことができた。これで少しは子供達も安心して過ごせるだろう。

「だけど…：…これで…：…」

—それは兵器同然の在り方だ。自分は畏怖いふの対象となるだろう。

大きな力は安心と同時に恐怖を生む。少なくとも千年前の戦いの際は自分を恐れる人も少なからずいた。

ましてや今は魔法というものの自体が無いのだ。それを操る自分はたしてどんな眼で見られるか。……アルカはそんなことを考え視線を落とした。

（その点だけは残念だな。フィルちゃん以外の子達とも仲良くしたかったのに……ん？）

何やら騒がしい。

「こら！ 待ちなさい！ 危ないからまだ外に出ちゃダメって言ったでしょ!？」

「いーだろファイル姉ちゃんもう魔獣やつつけたんだからー！」

「うおーすげー！ マジで本当なのかー！」

「本物!? 本当に本物の魔法使い!?」

ファイルの怒った声と子供達のはしゃぐ声が聞こえた。振り返って見ると船の中から大勢の子供達が出てくるのとファイルがそれを追いかけて出てくるのが見えた。子供達はアルカの方に駆けてくるとあっという間にアルカを取り囲んだ。

「兄ちゃんすげー！ 何さっきの!?」

「ねーねーお兄ちゃん本当に魔法使いなの?」

「うおお!? 見るあっち！ 魔獣が沈んでくぞー！」

あっという間にお祭り騒ぎになっってしまった。少し遅れてゼーゼー息をしながらファイルがアルカの方に駆け寄ってくる。

「すゝすいませんアルカさん。さっきの映像見てたらみんな興奮しちゃって抑えられなくて……」

「あゝああゝうん。それはいいんだけど……」

アルカは近くにいた男の子の頭を撫でる。

「その……変なこと聞くけど、僕が恐くないのかい？」

「なんで？」

キヨトンとした顔でそう返された。

「いや、僕ってこんな人とは違う力を持ってるし、これを恐いとは思わないのかなって」

「んー。まあ兄ちゃんもなかなかだけどドラゴニックボンバーのクーゴ程じゃないからな」

「ドラゴニックボンバー？ クーゴ？」

「ああ、すごいんだぜ！ クーゴのファイナルギヤラクシーキャノンなんて一発で惑星をふっ飛ばすんだ」

「なにそれ怖い!？」

ー後でファイルとナビが説明してくれたのだが、子供達の言っていたのはアニメや漫画という娯楽作品の話で、魔法使いみたいなのにはある意味大人より適応できるんじゃないかと。……まあ、理由は何でもいいのだ。そんなことより……。

「あれ？ アルカ兄ちゃんなんで涙ぐんでるの？」

「ん……、何でもないよ」

アルカにとつては、こうして子供達と普通に会話できるのがたまらなく嬉しかった。

三章 『人類の歩いた道』

一千年ぶりに見た夢は悪夢だった。

黒煙の立ち上る破壊された街並みの中に“それ”はい
た。

ーもしも“それ”がいなければ、人類があそこまで

追い詰められることはなかったのではないだろうか？

魔獣とは、魔樹が撒き散らした瘴気しょうきに冒され変容してしまつた生物のことだ。ゆえに、どれだけ大きく姿形が変わつてもそれは人類が知る生物はんちゆうという範疇けたはずからは出ない。脳が有り、心臓が有り、桁外れけたはずに生命力が高いものの殺せば死ぬ。

―だが、ただ一種違うものがいた。“それ”だけは瘴気によつてこの星の生物が変化したものではなく、魔樹の中から這はい出だしてきた。

“それ”は生物と呼んでいいものかすらわからない。“それ”は一定の形がない。脳がない。心臓がない。細胞細胞すらない。なのに動く。人間を殺す。明らかに高い知

性を持っている。そして、何をしても死なない。

“それ”はゴボゴボと表面を泡立たせ血のような紅い眼を作り出し、アルカを見た。

“それ”はまるで笑うように眼を歪^{ゆが}める。

『アルカ^{||}ニーベルク』

『お前を、今度こそ、必ず……』

十

「アルツカさん♪ あーさでーすよー♪」

歌うような声でそう言われてアルカは眼を覚ました。

眼を開けるとそこには自分を見つめるファイルがいた。

「おはようございますアルカさん。朝ですよ？」

「……………ん」

アルカはベッドの上で身体を起こした。ぼんやりしつつ周りを見る。

アルカがいるのは二段ベッドの下側だ。傍かたわらには先に起きて着替えを済ませていたらしいエプロン姿のファイルが立っている。

昨晚の魔獣を倒した後、アルカのこれからの生活についての話になったのだが、アルカはファイルと同じ部屋に住むことになった。

アルカはこの時代のことのでわからないうことが多し、その方がいいたろうとフィルが気を効かせてくれた結果だ。

最初、流石さすがに年頃としごろの女の子と同じ部屋で寝泊まりするのは悪いと思つて断つたのだがそこはフィルに『大丈夫です！』と押し切られた。

で、部屋で荷物をまとめ落ち着くやいなや、フィルは豹変ひょうへんしたように千年前のことや魔法のことを聞かせて欲しいと眼を輝かせてせがんできた。落ち着いた子だと思つていたがこの時ばかりはまるで小さな子供のようだった。

というより、同室にしたのはアルカのためというのは

どうやら建前たてまえで、そっちの事を聞きたいというのが本音だったようだ。

ーただ、眼をキラキラさせて話を聞いてくれるのはアルカにとつても楽しかった。

「ちよつと寝ぼけてます？ ……昨日は夜更かしさせちゃつてごめんなさい。楽しくつてついで…」

「いや、僕も楽しかったし気にしないで。君さえ良ければ今晚も続きをするけどどうかな？」

「ホントですか!？」

パアツと嬉うれしそうにファイルが顔をほころばせる。頭に生えた猫耳がピコピコ元気よく動いている。基本的に

落ち着いてるのにこういう子供らしいところがあるのが可愛らしい。
可愛らしい。

だが自分のテンションが上りすぎているのに気づいたのか、ファイルはコホンと咳払いして仕切り直した。

「これからまだ寝てる子を起こしたら朝ごはんにするんで、それまでには着替えて食堂まで来てくださいなね」

「うん、わかった。ありがとう」

朝は忙しいのだろう。ファイルはパタパタと足早に部屋から出ていってしまった。そんなファイルの後ろ姿を見送り、アルカは自嘲気味に笑う。

—嬉しいと思っってしまった。

魔樹の封印が解けてしまったのは間違いなく悪いこと

のはずだ。だが、眼を覚ましてすぐそばにファイルの姿があったことに安堵あんどしてしまった。幸せだと思っってしまった。

アルカは首を振り、壁を見る。そこには昨夜『クリーニングしときますね』とファイルが持っていたが外套ががかけられていた。

手に取り、広げてみる。……一応、異空間にいた時もたまたま魔法を使つて汚れ取りはしていたのだがそれとは見違える程に綺麗きれいでふんわりしている。まるで新品のようだ。それに何かいい匂においまでする。それだけでこの時代の技術の高さが感じ取れた。

部屋を出て昨夜教えてもらった食堂に向かう。

「あ、おはよーアルカ兄ちゃん」

「おっはよー。ねえねえ、あとでまた魔法のお話してね？」

「もうすぐ朝ごはんだよ。ほらこっちこっち」

道中他の子供達に出会うとそうやって挨拶あいさつの声をかけられる。

―昨夜、ファイル程詳しくはやっていないが他の子供達にも魔法や昔の戦いのことについて話したのだが、どうやら懐かれたようだ。

子供達はアルカの手をぐいぐい引っ張ったり背中を押したりして食堂まで連れて行く。

食堂の扉の前に立つとシュンと音を立てて自動で扉が開き、圧を感じるような子供達の声が押し寄せてきた。

「おーい！ お皿！ お皿持ってきて〜！」

「スプーン足りる？ 椅子いすは？ コップは？」

「フィル姉〜。おかわりっしていいの〜？」

「あ、アルカお兄ちゃんだ。おはよー」

「おはよーございます。昨日はよく眠れた？」

「おはよーアルカ兄ちゃん。また後で魔法の話聞かせてくれよな」

食堂に行くところそこに集まっていた子供達に次々と挨拶された。みんながみんなアルカに興味津々きょうみしんしんのようである。まるでヒーローを見るような眼をアルカに向けている。

— 不思議な気分だった。

この間まで千年の孤独にいたのに今はこうして大勢の子供達に囲まれている。……また涙腺が緩みゆるそうになっただがそれはなんとか堪えた。ここで泣き出すのはあまりに格好かつこう悪い。

(そういえば……食事をするのも千年ぶりか……)
他の子供達に促うながされて長テーブルの席につく。

昔からあまり食事にこだわる方ではない……というか『栄養さえ取ればいい。それより魔法の研究したい』
と言って栄養を魔法で濃縮した丸薬がんやくを水で流し込むような生活を送っていた時期すらあった。

だが千年ぶりともなると楽しみにもなる。それに時代

が変わって食事というものがどう変わったかという知的
好奇心こうきしんもあつた。

そして少しするとファイルが白い皿に盛られた料理を持
って来てくれたのだが……。

（………何これ？）

まず、アルカが慣れ親しんだようなパンではない。白
いつぶつぶ、スプーンでつついてみると弾力があり、少
しベタベタしている。

（………なにこれ、虫か何かの卵みたくで気持ち悪い。こ
れ食べるの？……いやまあ、この白いつぶつぶは百歩
譲っていいでしょう。……この上にかかっているものは
何だ？）

白いつぶつぶの上には茶色いドロドロしたものがかかっている。

（あ……そういえば昔錬金術師の研究所の事故で大発生したアンデッドスライムが確かこんな感じの……ホントにこれ食べるの？）

「どうかしました？ アルカさん」

アルカがスプーン片手に葛藤かつとうしているとファイルが自分の皿を持ってアルカの隣に座った。

「ああ、ファイルちゃん。……いや、えっと……この料理は、何ていうものなんだい？」

「カレーライスですけど、見たことありませんか？ 昨日のシヨツピングモールから持ってきたやつです」

謎なぞの料理はカレーライスというらしい。聞いたことが無い名前だ。

相変わらず葛藤しているアルカを尻目しりめにファイルが音頭おんどを取り、手を合わせて子供達と一緒に「いただきます」と言っいて食べ始めた。……みんな美味おいしそうに食べている。

アルカは勇気を出してスプーンでカレーライスをちよつとだけすくう。そして眼をつぶり、ぱくりと一口食べてみる。するとどうだろう、口の中に絶妙な辛さとコク、旨味が広がる。それはアルカが経験したことのない美味しさだった。

「どうですか？ お口に合いましたか？」

「すごい……こんな美味しいもの初めて食べたよ！」

「あはは、そんな大げさな」

「いやいや全く大げさじゃなくてね！ 特にこの辛味……もしかして香辛料「じゆしんりょう」が入ってたりするのかい？ 僕を歓迎してくれてってことかもしれないけど無理はしなくていいんだよ？」

「？……そりゃあ、カレーライスには香辛料はいつぱい入ってると思いますけど……」

「いつ……ぱい……？」

ファイルの言葉にアルカは固まってしまった。

ファイルが『どうしたんだろう？』と少し不安な顔をしているとナビが小さなプロペラ音を立てて飛んでくる。

『説明。アルカIIニールク。現在では香辛料は地域間

わず安定して栽培できるようになり、また保存料としての価値も他の方法が確立されたことによつて大きく下がっている。遠慮せず食べて問題ない』

「そ、そうか。よかつた……」

ナビの言葉にアルカはホツと息を吐き、美味しそうにカレーライスを食べ始める。

「ナビ。さっきのはどういふことですか？」

『説明。フィルーフエリット。昔と現在では香辛料の価値が大きく変わっている。例として挙げると厨房の棚にある胡椒瓶こしょうびんを覚えていたるだろうか？』

「はあ、ありましたね徳用の大きなやつ」

『感覚的なものだが、あれが乗用車と同等の価値を持つ

ているようなものだ』

「マジですか!？」

ファイルはアルカとカレーライスを交互に見比べる。

「……アルカさんって、本当に昔の人なんですネ……」
ファイルはそうしみじみと呟つぶやいた。ナビはワインワインと音を立てる。

『しかし、食料のことに關しては今は彼の持つ知識の方が有用かもしれぬ』

「ん？　どういうことだい？」

話を聞いていたアルカがカレーを頬張ほおばりつつそう尋ねる。

『要請ようせい。アルカニニベルク。後ほど前部甲板まで来て

欲しい。そこで重要な話がある。是非貴殿ぜひきでんの知恵を借り
たい』

十

朝食を終えアルカ、フィル、そしてナビは船の前部甲板に集まっていた。今日はあいにくの曇り空くも。上着がな
いと辛い寒さだ。

「水と食料の備蓄があまりない？」

「はい……。このまま何もしなければ数日中に底を尽き
ます」

『元々は保存庫にそれなりの備蓄があっただが、船内

で起きた魔獣との戦闘でその多くを失った。加えて、この船に乗っているのは成長期の子供ばかり。量の制限や栄養の偏りは後々病気等の深刻な事態に繋が^{つな}りかねない』

―なるほど。わざわざ場所を移したのは他の子供達を不安にさせないためだろう。

「そういえば僕がいた……シヨツピングモール？ あそこにはファイルちゃんがいたのも食べ物を探しに来たからだつて言つてたっけ？」

『肯定。大量の食料が残されている可能性が高く、海辺に近く、MP粒子が薄いという好条件が揃^{そろ}つていたためにファイルルーフエンリットの判断の元、食料確保に向かつ

た。……とはいえ一度に運べる量には限りがある上、魔獣に襲撃されるリスクもある』

「それで、アルカさんの魔法でどうにかならないかなって思ったんですけど……どうです？」

ふむ、とアルカは考える。

水や食料の問題は時代が変わっても変わらずついて回る問題のようだ。だがそういう事なら少しは力になれる。「食料はともかく、水についてはすぐにでもなんとかかなるよ」

「本当ですか!？」

「うん。ナビ、雨水を溜^ためる設備とかは大丈夫かい？」

『設備は問題なし。雨水の収集と濾^ろ過^か装置は健在。だが、

現海域の降水確率は二十パーセント程。まとまった降水は期待できない』

「ああ、それは問題ないよ。集めるから」

「……集める？」

首を傾^{かし}げるフィルに対し、アルカは気軽な調子で杖^{つえ}を空に向けた。空中に魔法陣が展開され、そこから光の玉のようなものが空を覆^{おお}っている雲目掛けて打ち上げられる。

変化は劇的だった。船の真上の雲が渦を巻き始めたかと思うと空全体を覆っていた雲がその渦になだれ込んでいき、合わせて真上の雲がどんどん黒く、高度を下げてくる。

そして次の瞬間、雷の轟音ごうおんがしたかと思うとバケツを引っくり返したような豪雨が船に降り注ふいでいた。そそ

「わきゃあ!？」

ファイルが驚いて悲鳴を上げる。アルカは傘かさのように魔力障壁を展開して雨を防いだ。

—数分ほど経たつと先程まで降り注いでいた雨はさっぱり止んだ。空はカラッと晴れ渡る青空。さっきまでの豪雨が嘘うそのようだ。

「あ、相変わらずすごいですね……。魔法って……」

『……質問。アルカハニーベルク。参考として聞きたい。どのような原理で雨を降らしたのか』

ナビの問いかけにアルカは「うーん」と腕を組んで考
える。

「雲ってというのは多かれ少なかれ雨の属性を持っていて
ね。その属性を強化したり周りから集めたりして一時的
に大雨を降らすんだ」

『その雨の属性とやらを強化したり集めたりする原理を
知りたいのだが』

「んー、強化する時は魔力をえいやっ！ て感じで叩き^{たた}
込んで、集める時は魔力を周りの雲にひっかけてよっこ
いせ。って引っ張る感じかな？ なんにせよイメージが
大切だ」

『……………了解。魔法というものは当機では理解しがた

いものだと理解した』

アルカとナビの会話にファイルは苦笑いを浮かべる。

「何はともあれ、水の方は大丈夫かな？ ナビ、どうですか？」

『確認中。……十分な貯水ができた。しばらくは水を自由に使っても問題ないだろう』

「お役に立てたなら幸いだ。で……問題は食料か」
アルカは先程までと違って難しい顔をした。

「食べ物にはアルカさんでも難しいんですか？ 前に何も
ないところからたくさん剣けんを出したりしてましたし、あ
あいう感じに食べ物を出したりは……」

「いや、無理だ。見た目だけならそれっぽい物を作れて

も、それはあくまでも僕の魔力で作りに出したハリボテみたいな物でね。時間が経つと消えてしまおうし、食べても栄養にはならないんだ。」

『質問。アルカリーニールク。では魚を獲る魔法等はないだろうか？』
 「釣り竿とか銛ざおなら作れるけど……うーんちよつと微妙かな。魚を獲るって目的で魔法を作ったことなんてないからね」

そもそもアルカはどちらかと言うと引き籠りがちで船旅などあまりしたことがなかった。

それもあって食べ物が足りないという事態は雨が降らなかつたり害虫の大量発生などが原因で作物が取れなく

なつて起こるといふのがアルカの認識で、わざわざ魚を獲つて食べようなどとろくに考えたことも無かつたのだ。

何か他の魔法を漁に應用できないかとアルカが考えていると、ファイルが何かを思いついたのか手を上げた。

「あの、アルカさん。魔法戦記にそういうことしてるシーンがあつたんですけど、人を人魚にしたりはできません?」

ファイルの言葉にアルカは苦い顔をした。

魔法戦記。千年前の戦いを元に書かれたらしい戦記小説。

気になつたのでサラッと斜め読みしてみたのだが、確

かに千年前の戦いを元にはしているものの、かなり大げさに書かれているというかなんというか。

特に主人公のアルカが超絶イケメンな完璧超人かんぺきなど美化が激しく、読んでいてベッドの上で悶絶もんぜつした。あと、魔法戦記を元にして書かれたライトノベルというのも読んでみたが自分が『天然魔法少女―アルカちゃん』になっっていたのはどういう見か。

「人を人魚につてのは無理かな。人間の身体……特に他人の身体を変容させる魔法もかなり難しくてね。魔力で相手の身体を覆い、魚のヒレのようなものを形造って泳ぎやすくしたり力を強化したりはできるけど人魚そのもの

のにはできないんだ」

「あ、泳ぎやすくはできるとはですね？　じゃあ、それやってみてください。私が海に潜って魚を獲ってきますー！」

「いやいや、それはいくらなんでも……」

—そんなことはできない。アルカはそう思った。

まず危ない。確かに海は陸地よりは遥かに魔獣が少なく、食べられる魚もいるだろう。

だがそれでも魔獣が出てくる可能性はゼロではないし、そうでなくともサメなどに襲われたりするかもしれない。

それに、人が素潜りすもぐで魚を獲る素潜り漁というものはあるが、あれはもつと浅い穏やかな海で行うものだ。対してここは遠洋。深いし、魚の動きも速い。いくら魔法

で泳ぎを強化したところで所詮しょせんは人間。素早い魚の動きについていけないはずがない。

だがアルカがそれを説明して断ろうとすると、ファイルはあっさりと「あ、それなら大丈夫です」と返してきた。

「それじゃ私、水着に着替えてきますね。ナビ、その間に説明お願いします」

そう言っつてファイルは軽い足取りで船の中に戻っつていっつてしまった。取り残されたアルカはポカンとしつつつそれを見送る。

「……気のせいかもしれないけど、なんかファイルちゃん
はしゃいでない？ 初めてあつた時は歳としのわりに大人っ
ぽいというか、もつと落ち着いた印象だつたんだけど」

『推測。それは貴殿がいるからであろう』

ナビの言葉にアルカは首を傾げる。

「僕？」

『フィールルフエンリットは他の年少の子供達の手前もあって落ち着いた言動を心掛けているが、実際のところはまだ十五歳の子供である。現に彼女には内密のままモニタリングしていたが、彼女にかかっていた精神的ストレス値は相当なものであった』

「……この状況だしね。無理もない」

『だが貴殿が正体を明かして以来、そのストレス値は大幅に軽減された。貴殿が頼ることができる年長の男性であることに加え、彼女にとって貴殿はまさに物語の中の

憧れ^{あこが}の英雄そのものだ。おまけにこうして魔法という彼女程の年齢のものであれば好奇心を掻^かき立^たてられるものに触れる機会まである』

そこまで言うとなビはアルカの方に向き直り、頭を下げるようにボディを上下に揺らした。

『アルカ||ニーベルク。どうか彼女に良くしてやって欲しい。きつと彼女も喜ぶであろう』

「うん。もちろんだとも」

『感謝する。……大きく話が逸れたので早急に当機の役目に戻る』

まるで仕切り直しをするかのようにナビはウィンウィンと音を立てる。

『まず貴殿の懸念けねんの一つ目。ファイルIIフェンリットが海に潜った場合、魔獣や肉食生物に遭遇する可能性があるということに関してだが、そちらは生体センサーによって安全を確認することができると』

「せーたいせんさー……。そういえばファイルちゃんが僕を見つけられたのもそれのおかげだって言ってたけど具体的にはどういうものなんだい？」

『簡単に説明すると音波や電波による探査に加え、生物もろもろの動きによって生じる振動、温度変化、心音、その他諸々の観測情報を集め、そこからさらに気象条件や海流等によって生じるノイズをコンピューターの計算によって除去。周囲にどのような生物がいるかを極きわめて正確に

知ることができるといっもののである。この船の観測機器も並行して運用すれば周囲半径三十キロメートル、海中は深さ三千メートルまで観測可能。適切に運用すれば、ファイルルーフエンリットが敵性体の攻撃を受ける可能性はほぼ無くなるだろう』

「……今サラッとすごいこと言ったね」

それだけの範囲を単独で観測する。魔法でそれができるだろうか？ ……無理だ。先程ナビが言った情報を全部頭に叩き込むなんて事をすれば脳がパンクする。

少し悔しいが、そういうことに関しては魔法よりも科学というものの方が優れていると認めべきだろう。『二つ目。ファイルルーフエンリットが海に潜ったところで

魚を獲ることはできないということに関してだが、貴殿の魔法というものが未知数のため断言はできないが、フイルーフエンリットであれば問題ないと当機も考えている』

「問題ない？ ……この時代の魚は僕の知る物より動きが遅^{ひてい}かったりするのかい？」

『否定。 ……これに関しては説明よりも実際に見た方が早いだろう』

ナビがそう言った直後に、甲板を駆けてくる足音が聞こえた。

「お待ちせしましたー」

「ああ、おかえりファイルちゃーぶっ!？」

「？ アルカさん、どうかしました？」

— 名称は後で知るようになるのだが、戻ってきたフイルが着ていたのはスベスベした紺色の生地*の*いわゆる水着というものであった。なんでも荷物の中に紛れ込まぎんでいたらしい。そんな水着姿のフイルを前にアルカは顔を真まっ赤かにしていた。

「あのー？ アルカさん？」

「い、いや、そ、その……は、肌を見せすぎじゃないかい!?」

アルカは全力で眼のやり場に困っていた。

露あらわになっただきめ細かい健康的な肌。柔らかかそうな胸の膨らみ。細い腰まわりにスラリと伸びるスベスベの脚。

女性経験がない上に千年以上一人で過ごしてきたアルカにとつて、少女の水着姿というのは刺激が強すぎた。ファイルに対しては妹のような感情を抱いているのだが、眩^{まぶ}しすぎて直視できない。

「千年前だと女の人があまり肌を見せることつて無かつたんですか？ この水着つて学校の授業で使うやつなんでだいたい露出は少ない方ですよ？ すごい水着なんてこれとは比べ物になりませんから。……紐^{ひも}みたいなのやつとか」

「ひ、紐!? あ、頭クラクラしてきた……。というか！ 寒くないのかい？ 僕上着着てても少し肌寒いくらいなんだけど」

「あ、それは大丈夫です。私、普通の人より体温高いんで寒いのは結構平気なんですよ。……暑いのは苦手ですけど」

そう言うフィルの猫耳は先程からピコピコ元気に動いている。確かに寒そうには見えない。あまりに普通にしているので意識しなくなっていたが、フィルに付いている猫つぽい耳や尻尾しっぽに何か関係あるのだろうか？

「それより、アルカさんが言っていた泳ぎを速くするっていう魔法かけてくれませんか？ あ、あとお魚を獲る銛とかも作ってくれたらありがたいです。えと、アルカさんたくさん剣とか作ってましたしできますよね？」

「う、うん」

アルカが杖に付いた宝石を軽くフィルの額に当てる。するとそこから蒼白あおしろい光が溢あふれ出しフィルの身体を包み込んだ。フィルは無邪気むじゃぎに「わく♪」と歓声を上げている。

さらにアルカが銛を作って手渡すとフィルは握りを確かめてコクリと頷うなずいた。

「それじゃ、行ってきますね」

「行くって……わ!? ちよっ!? フィルちゃん!?」

フィルはためらうこと無く柵を乗り越え、止める間もなく海に飛び込んでしまった。

慌ててアルカが船から見下ろす。すると海の中をもものすごい速さで動き回る影が見えた。最初はイルカか何か

かと思っただがそれにしては小さいし肌色の部分が見える。
「な、なんか海の中をギョングョウ動き回ってるんだけど、あれ……ファイルちゃん？」

そうしてしばらく見ているとその影ーファイルが海面に顔を出した。

「獲れましたー♪」

掲げられた銚には大きな魚が刺さっていて、こちらに向いて元気よく手を振っている。その姿はまるで本物の人魚のようだった。

ーはつきり言って凄まじい^{すさまじ}。確かに身体能力を強化はしたが正直これほどになるとは思っていなかった。

「……ねえナビ。ファイルちゃんはどうやって生まれたん

「だい？」

再び海に潜り、海中を縦横無尽じゅうおうむじんに泳ぎ回るファイルを見ながらつづ呟くようにそう言った。

『アルカリーニベルク。質問内容をもう少し明確にして欲しい』

「ファイルちゃんみたいな……ほら、あの猫耳とか尻尾、それにあの身体能力。自然に産まれるとは思えないんだけど。……そういえばファイルちゃん、自分のことをデザイナー・チャイルドって言ってたっけ」

ナビがその質問に答えるまでに少し間があった。

『……説明。デザイナー・チャイルドとは遺伝子——例えるなら人体の設計図のようなものだと思ってくれれば

いい。その設計図を書き換えることにより瘴気への耐性を持った胎児たいじを作り出し、さらにその胎児に対して瘴気によって起こる変容を人為的じんいてきに施した者。人間と魔獣の中間とも言うべき子供のことである。特徴としては、彼等かれらは瘴気に対する極めて強力な耐性と、通常の人間を大きく上回る身体能力を持っている』

「……やっぱり悔しいな。研究はされていたけど、それは魔法では辿り着けなかつた領域だ」

呟くように言ったアルカに対し、ナビは視線を向ける。

『……質問。アルカーニベルク。貴殿のこれまでの言葉の節々から、貴殿は神という存在を信じていると考えるが、ファイルIIフェンリツトのような存在に嫌悪感けんおかん等は

無いのだろうか？』

「嫌悪感？」

アルカが聞き返すとナビはチラリとカメラを今も泳ぎ回って魚を獲っているファイルに向ける。その仕草はどこか娘を見る父親のような人間味を感じさせた。

『“遺伝子操作は神の領域” 自然の摂理に反している”。

……デザイナー・チャイルドの技術が確立してからある程度時間が経過したが、現在でもそう言ってファイル・フエンリットのような存在に嫌悪感を持つ者は後を絶たない。特に神を信仰する者ほどその傾向は顕著である。アルカ・ニールベルク、貴殿はそうは感じないのだろうか？』

—そういえばファイルも会ったばかりの時にそういう

事を言っていた。もしかしたら本人もその事を気にしているのかも知れない。

「……まあ信仰は人それぞれだし、嫌悪感を持つという人を全否定する気はないけれど」
アルカはそう前置きして小さく笑う。

「神さまはきつとそんなことで怒ったりはしないさ。むしろ喜んでるんじゃないかな？」

『喜ぶ？ ……貴殿がそう言う根拠は？』

「ごく簡単なことさ。子が親を超えていくのは、親にとって何より嬉しいことだろう？」

アルカは当たり前のようにそう言った。

「これは古い神話なんだけどね。 ……ずっとずっと前、

僕が生きた時代よりも遙か昔にも人類は一度滅びかけたんだ。世界が枯れ、多くの人々が住む場所を失い、寒さに凍え、飢えて死んでいく。

当時は神さまだったので今より身近な存在でね。神さまも人間と一緒に地上で暮らしていたんだ。そして神さまは滅びかけた人間を救うために奇跡を成した。

時を駆け、新たな世界を創り、新たな生命を産み出し、死んだ人達を蘇よみがえらせた。それが神さまの成した四つの奇跡。そうして人々を救った神さまは最後に困難に打ち勝つ力『魔力』を授けさず……全ての力を使いすべはたし、地上を去っていった。

そこから魔法使いというものは始まった。かつて神

さまが成した四つの奇跡。すなわち『時空移動』『世界開闢』『生命創造』『死者蘇生』。その四つの奇跡を再現し『あなたの子供達はこれだけのことができるようになりました』と神さまに披露し、かつての感謝を伝える。それが僕達魔法使いの信仰にして、魔法使いが歩む魔道の最果てだよ」

アルカは眼を細める。その表情には様々な感情が入り混じっていた。

「……人類は魔法を失った。神さまからいただいた奇跡を無くしてしまった。けれどそれでも、人々は止まらなかつた。そして科学というものを産み出し、かつての魔法で成し得なかつたことを成している。人の手で神さま

の奇跡に手を伸ばしている。今頃いまごろ神さまは手を叩いて喜んでるんじゃないかな？ 『あのちっぽけだった子供達が自分の力だけでここまで大きくなっただか』ってね。魔法が無くなってしまったのは残念だし悔しいけれど、僕はそれでも進み続けた人々がとても愛いとおしくて誇らしく思うよ」

アルカは静かにそう言っつて、ファイルの方を見ながら笑みを浮かべた。

「というかさもそも！ そのデザイナー・チャイルドつてのが良いか悪いかつてのとファイルちゃんがいい子かどうかっていうのはまったく別の問題だろう？ ファイルちゃんはとても強くて優しいすば素晴らしい子だ。そんな彼女

を嫌いになんてなるわけがない」

『……貴殿の言葉は貴重な意見として当機のメモリーに記録しておこう』

そう言ってワインワイン音を立て始めるナビの姿はどこか笑っているようにも感じられた。そんなナビをアル力はジツと見つめる。

『……質問。アルカニーベルク。当機に関して何か疑問点があるだろうか？』

「ん……まあ二つほど。ナビ、君はファイルちゃんと付き合いは長いのかな？」

『肯定。以前は彼女の父親に付いていたが、彼女が生まれた折に彼女の支援を行うようにと指示を受けた。付き合いといつな

らファイル＝フエンリットが生まれた時からといついことになる』

「ああ、なるほど、道理で。じゃあ二つ目なんだけどね。ナビ、君は心があるのかい？」

その質問にナビが答えるのに少し間があった。

『……否定。当機はあらかじめ設定されたプログラム……貴殿にわかりやすい言葉を選ぶのであれば決まりごとに従って会話している。学習機能によってそれらしく振る舞うことは可能だが、一般的にいう心というものは備えていない』

「そうなのかい？ どう見ても君は……まあ、当人がそういうなら追及はしないけどさ」
アルカはくすりと笑い、ナビに対して軽く頭を下げる。

「ナビ。君ともこうして話せて良かった。末永く、彼女達のことを見守ってあげて欲しい」

『無論。それが当機に与えられた役目である』

—それから数時間、ファイルは抱えきれないほどの魚を獲ってきた。

「おー、すげー！」

「このお魚どうやって料理するのかな？ ナビ、デー
タ出して〜」

「お、この魚知ってる。生のまま刺身で食べると美味うまい
んだぜ」

「え!? 魚を生で食べるのかい!?!」

「あの! あの! お刺身先に味見してみてもいいです?」

「ファイルお姉ちゃんっってお魚好きだよね。……猫耳だから?」

ファイルの獲ってきた大量の魚に子供達は色めきたった。単純に食料が確保できたということ以上に魚そのものが子供心を刺激したのかもしれない。

流石に魚ばかりだと飽きるし栄養バランスも悪いので多少は陸地に食料を取りに行った方がいいだろうが、こうして魚を獲れるのなら少なくとも飢えて死ぬようなことはあるまい。

食料周りの問題はとりあえず目処はついたと言ってもいいだろう。あと、初めて挑戦してみたお刺身というものは意外と美味しかった。

そしてー。

アルカは自室でベッドに腰掛け、慣れない手つきでタブレット端末を操作していた。

アルカが見ているのは科学史だ。これまでの科学の発展を時系列順に追っていく。

錬金術から派生したと思しき様々な研究、蒸気機関の発明と発達、そして電気文明に移行してからの爆発的な

科学の発展。素晴らしい。

まるで我が子のアルバムをめくるような表情でアルカはそれらに眼を通していく。

「あれ？ アルカさんタブレット操作できるとはなつたんですか？」

そう言いながらファイルがシャワールームから出てきた。子供用のパジャマがあまり無いらしく、大人の男性用のワイシャツ一枚だけという格好だ。タオルで濡れた髪をふきつつアルカの隣に座ってタブレットの画面を覗き込んでくる。ふわりと石鹼せっけんのいい匂いがした。

（こゝこの子やっぱり無防備すぎない？ 一応僕、男だよ？）

アルカは内心少々ドギマギしていたが、なるべくそれは表に出さず平静に答える。

「うん。ナビが操作の仕方を教えてくれてね」

「そうですか。……そういえばナビは？」

アルカは部屋の隅の机を指差す。そこには台座のようなものの上に乗っているナビがいた。

「ファイルちゃんがシャワーを浴びてる間に『メンテナンスのためにスリープモードになる』って言ってからあの状態だよ」

「じゃあしばらくはあのままですね」

そう言うファイルはなんとなく距離感が近くなっている気がした。

タブレットを覗き込みながら軽くアルカの肩に体重を預けてきている。

「あの、アルカさん」

ファイルが甘えるようにこちらを見上げる。その仕草は思わず胸がキュンとしてしまうような可愛らしさだった。

「な、なんだい？」

「さっきはありがとうございました。私、ああ言ってもらえてすごく嬉しかったです」

—さっきとは何のことだろうか？

アルカがキョトンとしているとファイルは少し申し訳なさそうに笑う。

「えっと、すいません。盗み聞きするつもりはなかった

んですけど、私普通の人よりものすごく耳がよくて……。私がお魚獲ってる時、私のこと話してましたよね？」
「あの距離で聞こえてたのかい？」
フィルの頭に生えた猫耳がピコピコしている。これは内緒話も難しそうだ。

「……今ではこの身体に感謝してますけど、小さい頃は悪く言われたり、いじめられたこともありました。私も……ちよつとだけ自分の身体のことには気にして……。だから、ああ言ってくれたのがすごく嬉しかったです。私、自分に少し自信が持てました」

フィルはそう言って花が咲くように笑う。——可愛い。思わず手が伸びて、フィルの頭をくしゃくしゃと撫なでた。

「ん……」

「あ、ごめん。嫌だったかな？」

「いえ。耳を触られるのはくすぐったいですけど、こっ
やって頭撫でられるの、気持ち良くて好きです……」

ファイルは気持ち良さそうに眼を閉じた。穏やかな時間
が過ぎていく。

「にやあ……」

——癒いやされる。このままずっと撫でていたい。……が、
少しするとファイルはハツとしてアルカから離れた。

「す、すいません。なんだかつい気持ち良くなっちゃっ
て……。えっとですね。お礼を言いたかったのもあるん
ですがもう一つ、実はアルカさんをお願いしたいことが

ありまして」

「お願いしたいこと？」

もつと撫でていたかつたので名残惜なごりおしかつたが、真剣な話のようなのでアルカも姿勢を正す。

「アルカさん、私も魔法を使えるようになったりつて、できますか？」

ファイルの言葉にアルカは顔をしかめた。その表情にフイルも不安そうな顔をする。

「……あの、アルカさん？」

「……通常の方法では無理だ。魔法は基本的に生まれつき身体に魔力を宿した者にしか使えない」

「そう、ですか……」

ファイルはしょんぼりと肩を落とす。そんなファイルにアルカは少しの間何かを考え、そして次の言葉を告げた。

「……けど、普通でない方法でなら不可能ではない」

「本当ですか!？」

ファイルが期待に眼を見開く。だがすぐにアルカの苦い表情を見てそれが『簡単に魔法を使えるようになる』という話ではないことを察した。

「アルカさん、普通でない方法ってどうするんですか？」

「簡単に言うとな僕の魔力をファイルちゃんに分け与えるんだ。それをして、ちゃんと練習すればファイルちゃんも魔法を使えるようになる。ただ……」

「何か危なかったりするんですか？」

フィルの言葉にアルカは頷く。

「主な問題は二つ。最大の問題は魔力の暴走だ。魔力の扱いつて慣れないうちは暴走の危険が高いんだけど、他人の魔力を使う関係上その危険性は格段に跳ね上がる」

「……魔力が暴走するとどうなるんですか？」

「……最悪、身体の内側からの魔力を抑えきれず内臓をぐちゃぐちゃに潰つぶされて破裂する。……僕も一度だけ見たことがあるけどあれは……凄惨せいさんな光景だった」

アルカの言葉にその光景を思い浮かべてしまったのだろう。フィルの顔が青ざめている。

アルカはさらに立て続けに二つ目の問題についても話し始めた。

「二つ目。これはシンプルだ。魔力の通り道を作り、相手に魔力を受け渡すのにはおおよそで三十分ほどかかるんだけど、その間ものすごく痛くて苦しい。なにせ本来無い臓器を増設するようなものだからね。大の男でも悲鳴を上げて気絶するほどだ」

魔力の暴走よりこちらの方がイメージしやすかったのか、フィルの表情に怯え^{おび}が走った。……しかしそれは数秒ほど。フィルは表情を引き締め、決意に満ちた眼でアルカを見る。

「けど、それが魔法を使うのと引き換えなら我慢します！ アルカさん、やっていただけますか？」

「……どうしてそこまで魔法にこだわるんだい？　ただ便利そうだから欲しいとか、憧れとか、それだけではなさそうだけど」

「みんなを護^{まも}るためです」

ファイルは一瞬も迷わずそう答えた。

「……街が襲われた時も、船の中に魔獣が現れた時も、私は逃げることしかできませんでした。それで……、どうしてでも思っ^ててしま^うんです。私にもっと力があれば……」

——その感情は知っている。かつて痛いほど味わった。

「……他の子達は私にとって弟や妹みたいな感じでも可愛いです。それに私は、子供達を護るために死ん

でいった人達の想いおもも背負ってるんです。……絶対に護りたい。後悔したくないんです」

ファイルはそう言っただけであらためて頭を下げる。

「だから……お願いします。魔法を使えるようにしてください」

アルカは小さくため息をついていた。

——これは断れない。だってファイルの気持ちは痛いほどによく知っている。自分がファイルの立場なら間違いないと同じことをやっている。

「君に言っておくことが二つある」

アルカは優しく諭すような声で言った。

「まず一つ。死んでいった人達が護りたかった子供達に

は君も入っっているんだ。それを決して忘れないこと」

「……っ！ は、はい！」

「二つ目。魔法というのはただの力だ。使い方一つで善にも悪にもなる。これから魔法を覚えるにあたって、その意味をよく考えること」

「っ！！ ア、アルカさん！ それじゃ……」

興奮気味に眼を輝かせるファイルにアルカは力強く頷いた。

「ああ、ファイル！ フェンリット。君に魔法を授けよう」

―ファイルに折りたたんだハンカチを咥くわえさせる。魔

力を受け渡す際の苦痛で歯を食い縛り過ぎて歯が砕けたり、舌を嚙^かみ切ったりするのを防ぐためだ。

ベッドに深く腰掛け、フィルの身体を抱く。フィルがアルカの胸にしなだれかかっているような体勢だ。アルカは深く息をしながら自分の魔力を研ぎ澄ましていく。「フィルちゃん。僕に体重を預けて。無理かもしれないけどなるべく心を平静に。僕の身体に強化魔法をかけとくから苦しかったら思いっきりしがみついて構わない。痛みで暴^{あば}れたりしたら危ないし少しは気が紛れるだろう」

アルカの言葉にフィルは小さく頷き、ギュツとアルカに抱きついてくる。こうしているとあらためてその身体

の小柄さと軽さを感じる。

アルカは緊張を吐き出すように細く、長く息を吐いた。「それじゃ、始めるよ。覚悟はいいかい？」

ファイルが頷くのを確認するとアルカは自身の魔力を起動させた。

ファイルの背中に魔法陣が浮かび上がり、アルカの手がその魔法陣を通してまるで水の中に手を入れるようにファイルの身体の中に入っていく。

—接続、開始。

「ひぐっ!？」

ファイルが悲痛な声を上げた。

現代の人間が使わなくなった器官。魔力の通り道がア

ルカによってごじ開けられていく。

「くううっ……!!」

ファイルは眼にいつぱいの涙をため、アルカにギュツと抱きつき歯を食い縛って耐えている。

少しでも気が紛れればと空いた方の手でファイルの頭を撫でつつ、アルカは作業を進めていく。

—第三までの魔力路、解放。安定化、完了。第四と第五に問題有り。……こちらは通常の神経の一部と僕の魔力で代替品を作る。……完了。作業続行。

思考は努めて穏やかに、無感情に。

僅^{わず}かでも手を誤ればそれはファイルに激痛となつて襲いかかる。それは自分の身体を裂かれるより何倍も苦しい。

魔力路解放作業。完了。

魔力の通り道は開いた。次は自分の魔力をファイルに結びつけ、ファイルの中に魔力を貯蔵する器官を増設する。ファイルの身体に紋様もんようが浮かび上がり、肌に染しみ込むように消えていく。

— 幾つもの糸を結び合わせていくのをイメージする。なるべく急いで、けれども綻ほころびがでないように。慎重に、丁寧ていねいに。するとアルカの頭の中にある声が流れ込んできた。

（— 熱い、苦しい、よお……）

それはファイルの思考。他人と魔力を繋ぎ合わせた時に

たまに起こる現象だ。

悲痛な心の声に胸が痛くなるが、思考が流れ込んでくるのは魔力の接続が上手うまくいつている証拠でもある。アルカは慌てることなく、丁寧に作業を進めていく。

ーと、これまでの悲鳴のような心の声に混じって別の声と映像が混じってきた。

(けど……私は……!)

強い意志を感じた。同時に、自分の周りに船室とは別の風景が広がるのを感じた。

ー気がつけば、アルカはガタンゴトンと揺れる細長

い乗り物の中にいた。

「ここは……」

……魔力の接続、どうも上手くやり過ぎたらしい。

ここは現実空間ではなく、フィルの心の中。アルカルの精神がフィルの心の中に入り込んでしまったのだ。

珍しい事象ではあるが、相性あいししょうが極端にいい相手と魔力を繋ぎ合わせるとこういうことが起きる場合があると聞いたことがある。

今自分が乗っている乗り物は電車と言っただらうか？
確かナビに見せてもらった資料にあった。

後ろを振り返ると座席に座ったフィルと他の子供達がいた。

ファイルは他の子供達と笑いながら話している。楽しげな視線を窓の外へ。流れていく景色けしきを柔らかな笑顔を浮かべて眺めている。

……笑いながら、安心して遠くまで行けるかつての当たり前。今はおそらく世界中探してもどこにも無い光景。

周りの風景が切り替わる。

—涼風が頬ほおを撫でた。

地平線まで続く草原にアルカは立っていた。まるで緑の海。ふわりと風が吹くと草が揺れ、さざ波を作る。

見上げれば透き通るような青空が広がっていた。深く、鮮やかな青。そこに浮かぶ白い雲とのコントラストがよ

く映える。

「綺麗だ……」

その風景を見てアルカは我知らず呟いていた。ファイルの心の中にある風景。それはどこまでも綺麗で、澄み渡っていた。

「アルカさんアルカさん！」

その景色に見惚みほれていると後ろからフィルの声が聞こえた。クイクイとアルカの袖そでを引っ張っている。

振り返る……と、そこでは子供達がピクニックをしていた。草原にシートを敷いて、バスケットに入ったサンドイツチを頬張りながら楽しそうに笑っている。

「アルカさんも一緒に食べましょ？ 早くしないとなく

なっちゃんいますよっ？……今回のサンドイッチはなんと！ 新鮮なお魚をムニエルにして挟んだムニエルサンドです！ 自信作です！」

心の中のファイルはそう言って明るい笑顔を向けてくる。アルカはクスリと笑ってそんなファイルの頭を撫でた。

——この風景は美しい。けれど、ファイルは本物は知らないだろう。

ファイルは魔獣が復活してから生まれた子供だ。魔獣が蔓延^{はびこ}り瘴気が溢れてしまったこの世界にはもう、安心してみんなとピクニックできる草原なんておそらくどこにもない。

だからこれはきつと、物語か何かを見てファイルが思い描いた想像であり、憧れであり、願いなのだろう。

（今の世界では叶^{かな}うことのない願い……か）

—本物を、見せてあげたいと思った。

ファイルは知らないのだ。仲のいい友人達と見知らぬ土地を旅する楽しさも、だだっ広い草原に寝転んで風に吹かれる気持ちよさも。今の世界では想像し、憧れることしかできない。

それを体験させてあげたいと思った。その願いを叶えてあげたいと思った。

—正直に言っつて、周りから英雄視されることには未^{いま}だに抵抗がある。

アルカが命がけで戦ったのは自分の大切なものを護り
たかったからだ。言っってしまったえば自分のため。それがた
またま多くの人を護ることに繋がったただけだ。

……少なくともアルカはそう捉とらえている。真の英雄は、
無む辜この人々のために命を賭かけたかつての仲間達の方だと。

— だけど、この願いのためなら戦える。

その願いは美しかった。どうかその願いを叶えて欲し
い。叶えてあげたい。そのために力を振るえるというの
なら、魔法使いとしてこれほど誇らしいことはない。心
からそう思えた。

「けど、もう少しぐらい俗物的な欲を持ってもいいんだ
よ？ いや、心が綺麗なのはいいんだけどここまで純真

だと逆に心配になつてくるというかね？」

冗談交じりに心の中のファイルにそう言つと、ファイルはキョトンとした顔をした。

「よくわかりませんが、私お魚大好きですよ？ アルカさんも一緒に食べましょ？」

そう言つてファイルはムニエルサンドを差し出してくる。それで『お魚食べたい』がファイルの欲求なのだ気づいて、アルカは思わず吹き出してしまった。

—ああ、本当に、この子と出会えてよかった。

それから約三十分、全ての作業は完了した。

「終わったよファイルちゃん。大丈夫かい？」

ファイルはアルカの言葉にすぐには応えられなかった。アルカの腕の中で息も絶え絶えな様子でぐったりとしている。

身体中に汗が滲んでいて、着ているワイシャツはぐっしよりと濡れて絞れそうなほどだ。

だがそれでも意識ははっきりしており、アルカの呼びかけに小さく頷く。

「これで……私も、魔法を使えるように……なっただけですか……？」

どうにか呼吸を整え、ファイルはアルカを見上げて尋ねる。それにアルカは笑顔で答えた。

「ああ、自分の中に熱のようなものを感じないかい？」
 アルカの言葉にファイルは自分の胸に手を当てる。そしてもう一度小さく頷いた。

「その熱を意識して、自分の手に移してごらん。くれぐれも無茶な移し方はせず、ゆっくりと、腕を伝わせて移動させるイメージでね」

そう言いつつアルカはファイルの手を取る。ファイルは言われたとおりにやってみた。胸の中に感じる熱をゆっくりと移動させ、腕を通し、アルカが支えてくれている手のひらに。

すると手からもやのようなもの湧き出し、ファイルの手の中で渦を巻き始める。

ファイルは嬉しそうに表情をほころばせアルカを見る。それにアルカもニコリと笑い返した。

「おめでとう。これで今日から君も魔法使いだ」
こうして、この世界に何百年ぶりかの新しい魔法使いが誕生した。

—ただ、全然違う形でひと波乱あった。

「からだ……だるい、です……」

ファイルはそう呟いてぐったりしている。もう指一本動かしたくないといった様子だ。

無理もない。午前中は魚を獲るためにずっと泳ぎまく

っていた事に加え、さっきの魔力の受け渡しだ。

これまではファイル自身が興奮していたこともあつてなんとかなつてきたのだらうが、流石にそろそろ疲労の限界だ。

「疲れただらう。少し眠るといい」

「はい……そうします……」

ころんとファイルの身体をベッドに横たえる。

そのまますぐに眠ってしまうかと思つたがファイルは少し居心地いごちが悪そうに身体を震わせた。

「あの、アルカさん……。少しおねがいがあるんですけど、いいですか……？」

「ん、なんだい？ 何でも言つてごらん」

するとファイルは少し恥ずかしそうに頬を染めた。

「服、脱がせて……身体、ふいてほしいです……」

「……へ？」

アルカは固まった。

「汗でびしょびしょで……気持ちわるくて……おねがい、
できますか……？」

「え、あ……え」と、その、僕、一応男んだけど
……？」

「大丈夫、です……。ちよつと恥ずかしいですけど……
小さい子、お風呂ふろに入れたりして……なれてますから
……」

「いやいやいやー！ いろいろと問題のレベルが違わ

ないかい!？」

「？」

まるでアルカの言葉の意味をちゃんと理解していないかのようにファイルは不思議そうな顔をしている。

「とにかく、おねがい………します………」

もう喋るしゃべるのも億劫おっくうな感じだ。——これ、どうしよう？

アルカは引きつった笑顔を貼はり付けたまま固まっていた。
た。

正直逃げ出したい気分だったがファイルの服は触ってわかるほど汗でびしょびしょだ。このまま放置したら風邪を引いてしまいかもしれない。

「くしゅん！」

ファイルは可愛らしくくしゃみした。汗で冷えてきたのか、少し寒そうにも見える。

……風邪と言うと大したことがないと思うかもしれないが、医者がない船上では危険だ。

抵抗力が下がれば他の病気にもかかりやすくなるし、悪化して肺炎等を起こしてしまえば時として命にかかわる。そう思うとやはり着替えさせないわけにはいかない。

——まあ、後で冷静になって考えてみれば他の女の子でも呼んでできてその子に頼めばよかったのだが、そんな簡単なことには気づかないほどの時のアル力はテンパっていたのだ。

魔法に関しては確かに百戦錬磨ひやくせんれんまなのだが、なにせ千年

以上もの間、人との関わりがまかまったくなかったのだ。女性に対する免疫などもはや完全になくなっている。
 (い、いや、そもそもフィルちゃんぐらいの女の子を着替えさせるってこれだけ動揺している僕の方がおかしいのかも。千年前だとフィルちゃんぐらいの歳で結婚するような人も珍しくなかつたけど、今だとその辺の感覚も違うのかも。だ、だっただけこれだけドキドキしている僕の方がおかしくて、別にフィルちゃんの身体を拭いて着替えさせることは普通のことです……)
 思考がぐるぐるしてきているがアルカはどうにか心を落ち着けようとする。

「ぬ、脱がせる……よ？」

アルカの確認にファイルは小さく頷いた。

僅かに震える手で汗で濡れたシャツのボタンを上から一つずつ外していく。

細い首元や鎖骨の辺りが露あらわになる。しっとりと濡れた肌が艶なまめかしい。

柔らかな曲線を描く胸の膨らみ。……ボタンを外す時に指先が膨らみに触れて、ファイルがピクンと震えた。アルカの心臓もバクバク鳴っている。

スベスベのお腹なか、キュツと締まった腰回り。女の子の匂いがする。くらくらする。

なるべく目の焦点を合わせないようにはしているがどうしても見てしまう。

そのままボタンを外していく。ワイシャツの隙間すきまから可愛らしいへそ、さらにその下の小さなリボンがあしらわれた白い下着が見える。

「ん……」

ファイルは小さな声を上げた。やっぱり少し恥ずかしいらしい。顔は赤く、チラチラとアルカの反応をうかがっているのだがその姿がとても可愛い。

シミひとつない肌はきめ細かく柔らかそうで、まだ子供と言ってもいい年齢なのだがその身体はすでに女性らしさを帯びてきている。

シャツをはだけさせる。ブラジャーは着けていない。流石に恥ずかしいのか胸を手で隠しているのだが、その

恥じらって隠そうとする姿はむしろ男心を昂たかぶぶらせてしまうものだ。ファイル自身にはその自覚がまったくないという点も非常に破壊力が高い。

子供の可愛らしさと大人の魅力が同居しているというか。あと五年もすればきつと、女性として大輪の花を咲かせることだろう。

アルカはゴクリと息を呑のむ。

(いやちよつと待て僕。なんだゴクリつて)

少しでもファイルを女性として見てしまったことに自己嫌悪を感じつつ、アルカは極力冷静に努める。

「え、ええつと……脱がせていいんだよね？」

一応あらためて確認するが答えは変わらずファイルはこ

つくり頷く。

アルカは深呼吸し、覚悟を決める。

「えー……その、隠したままだと脱がせられないから……その、手を、どけて欲しいんだけど……」

「……っ」

アルカの言葉にファイルは小さく頷きはしたものの、手をどかすのをためらっている。

何かものすごくいけない事をしている気分になっただがとにかくシャツを脱がさないといけない。アルカはファイルの手をどかさうと手をかけた……その時であつた。

『アルカ……二ーベルク……貴様、何をしている……？』

―その時に感じた威圧感を例えるなら、良からぬ男

の魔の手から愛娘を護ろうまなむすめとしてしている父親のそれだった。だらだらと先程までとは違う嫌な汗が出てくる。恐る恐る振り向くとそこにはメンテナンスとやらを終えたらしいナビが浮かんでいた。

……何か微妙にブルブル震えているのはヴァイブレーション機能というやつだろうか。ウインウインと音を立て、ナビの両側面から細長いアームが出てくる。その先端がバチバチと稲光いなびかりを放ち始めた。

「ナ、ナビ？ き、君はきつとなにかとんでもない誤解を……」

『対人鎮圧兵装、シヨックアーム起動。フィルリフエンリットの保護のため、貴様を攻撃する』

「ちょっ!? ま……うわああああああ!?」

—その後、アルカは電撃を数発喰らったもののフィルの協力もあつてどうにか事情を説明できた。そしてナビにシヨックアームを突きつけられたままフィルの汗を拭いて別のワイシャツに着替えさせた。

身体を拭いている途中でフィルは体力の限界が来たらしくコテンと眠りこけてしまい、眼を覚ますまでの数時間、アルカとナビはろくに言葉を交わすこともなく気まぐずい時間を過ごした。

「ん……」

ファイルがもぞもぞと動き、ベッドの上で上半身を起こす。

まだ眠いのか眼をしょぼしょぼさせ、可愛らしくあくびした。大きめのワイシャツの袖で眼をこすりぼんやりとしている。

『ファイルーフエンリットの起床を確認。バイタルチェック……正常。ファイルーフエンリット、身体に違和感等は無いだろうか？』

その言葉にファイルはナビを見た。だがナビの質問には答えずブスツとしたジト目でナビを見ている。

『ファイルーフエンリット？』

「ナビ、私ちよつと怒ってます。駄目じゃないですかい

きなりアルカさんに電撃浴びせるなんて！」

『……それに関しては謝罪する』

「謝るのは私じゃなくてアルカさんにです！」

ナビを叱りつけ^{しか}るようにフィルはそう言った。子供っぽいところはあるがやはりこういうところはお姉ちゃん気質だ。

『アルカーニールク。その件に関してはすまなかつた』

「ああ、うん。いいよ、気にしてないから」

『……だがフィルーフエリット。当機は貴女の行動にも大きな問題があつたと指摘する』

「大きな問題？」

ファイルはキョトンと首を傾げる。

『いくら信用しているとはいえ、異性に対してあのよう
な事を依頼するのは厳に慎むべきだ。現実問題として、
当機がいなければアルカリーニベルクは抵抗できな貴
女に対して無理やり性行為に及ぶ可能性もあつたたと当機
は認識している』

「ちよっナビ!? 僕はそんなことしないよ!」

アルカが抗議の声を上げるがナビはまるで睨みつけるよう
に機体のカメラをアルカに向ける。

『当機は貴様がファイルリフエーンリットの身体を拭く、着
替えさせる等の作業をしていた間も、貴様のバイタルを
常にチェックしていた。その上で質問する。アルカリーニ

「ベルク、貴様はその際、フィル・フエンリットに対してよこしま邪な感情を一切抱いっさいかなかつたと、胸を張って言えるのか？」

「……い、いや！ だからってフィルちゃんにそんな変なことはしないよ！」

『その口ぶりだと多少は邪な感情を抱いたと判断するが相違はないだろうか？』

「……ごめんなさい。僕が悪かったです。お願いだからフィルちゃんの前でその話やめて……」

アルカは恥ずかしさと自己嫌悪で両手で顔を覆ってしまった。

いったいどんな顔をされているだろうと恐る恐るフィ

ルの顔色をうかがう。

だがファイルは相変わらずキョトンとした顔で頭にクエスチヨンマークを浮かべていた。

「アルカさん、ナビ。せーこーいって何ですか？」

「……………」

『……………』

アルカとナビが顔を見合わせた。

「え、えくと……ファイルちゃんは……赤ちゃんがどうやってできるか、知ってる？」

「やですねえ、もう子供じゃないんですからそれぐらい知ってますよ」

引きつった表情で聞いたアルカに対し、ファイルはクス

クス笑って笑顔で答えた。

「男の人と女の人が仲良くしてたらコウノトリさんが運んできてくれるんですよね？」

空気が固まる感じがした。ある意味間違っちやいないけどすごく間違ってる。

「ナビ、君に質問がある。……この時代の性教育どうなってるの？」

『……そういった知識を教育機関で教えた際、保護者から苦情が殺到し、それ以降そういった知識を教えなくなつたという情報がある』

「いや駄目だよな？ 明らかにまずいことになってるよね!? この時代のことに関してはこれまでいろいろと感

心しっぱなしだったけどそれはどう考えても本末転倒だよ!？」

何やら騒いでいるアルカとナビに首を傾げつつ、ファイルはニコニコと笑顔を浮かべている。

「アルカさん、その……せーこーい？　　というのをしたいのなら、私は構いませんよ？」

ファイルがそう言った瞬間アルカは吹き出した。ナビがプロペラの回転速度を間違えたのか急上昇して天井にぶつかかり墜落した。

ファイルはそんな二人の反応にちよつと不思議そうな顔をしながらも相変わらず無垢むくな笑顔を浮かべている。

「せーこーいというのはよくわかりませんが、アルカさ

んはしたいんですけどよね？ アルカさんにはいろいろと恩がありますし、何かお礼をしたいと思っただけなんです。だから私にできることがあれば言ったださい。何でもしますから」

「ナビ！ ナビイイツ！！ 間違ってる！！ 今の教育絶対間違ってる！！ 何でもするとか女の子が言っちゃいけない台詞せりふナンバーワンだろう!？」

『思案中……。Aランク優先事態と判断。緊急避難措置として一部年齢制限のかかっている情報の規制を解除。アルカーニールク。貴殿に協力を要請する。彼女には教えるべきだ。たとえそれが残酷ざんこくな真実であつたとしても』

そうして、二人の保護者によるファイルへの性教育が始まった。—どうしてこうなった。

約一時間後、そこにはベッドの上で布団ふとんを被ったまま悶絶しているファイルの姿があった。

「……ファイルちゃん。だ、大丈夫？　気にしなくていいよ知らなかったことなんだし……」

『当機もその言に同意する。ファイルIIフェンリット。貴女に責任は無い』

ファイルはもぞもぞと布団から顔を出した。恥はづずかしさからか顔は真っ赤で涙目になっている。

そんな表情も不謹慎ながら可愛いと思っってしまった。

「……アルカさんも、私の裸を見て……その……えっちな気分になつたりしたんですか？」

今までにない非難のこもった眼に耐えきれずアルカは視線をそらす。

「いや、えつとだね……男というのはそういう生き物で……その、本当にごめんなさい」

「私……恥ずかしかったけど、アルカさんならって……それに私つたらあんなこと言つて……うう……」

ポロポロとフィルの眼から涙が溢れてくる。遂にはヒツクヒツクとしゃくり上げ始めた。もう最高に気まずい。

「もうお嫁に行けなです……」

「そ、そんなことないさ！　ファイルちゃんならどこにだってお嫁に行ける！」

ファイルの小さな肩に手を置いて力強く言い切る。しかしファイルは泣きやまない。

「うう……だつて……だつてえ……」

「も、もしいざとなつたら僕がもらつてあげるから！　いや、君みたくない子なら是非ともお嫁に来て欲しい！　うん、是非お嫁に来てくれ！」

「……え？」

さつきまで泣いていたファイルが眼をパチクリさせた。

ただでさえ赤かったその顔がみるみる内にゆでダコもかくやというほど真っ赤になっていく。――とじつか、

自分は勢いで何かとんでもないことを言わなかつたか？

「あ、あの、アルカさん。そ、それって……」

おずおずと様子をうかがうようにファイルはアルカを見上げる。アルカの顔も赤く染まっっていく。

ーアルカの後ろでナビがシヨツクアームを起動させた。

「え？　ちよ？　ナビ？」

『攻撃対象、アルカ^{たご}ニールク。ファイル^{しゆくせい}フェンリツトを誑^{たご}かした罪で対象を肃清^{しゆくせい}する』

「いやいやいや!?　誑^{たご}かしたって……」

『攻撃、開始』

そうしてナビから電撃が放たれ、アルカはそれを魔力

障壁で防いで、ドタバタしながらもその日も一日を終えるのだった。

—今日も濃い一日だった。そして、幸せな時間だった。願わくば、こんな日が少しでも長く続いて欲しいと、アルカは心から願うのだった。

十

“それ”は数多^{あまた}ある魔獣の中で、唯一人間以上の高い知能を持っていた。

“それ”は千年前の戦いにおいて、その知能をもつて

魔獣を操り、人類を滅亡寸前にまで追い詰めた。

……だが、千年前の戦いの結果は知つての通り、人類が勝利した。

—何故我々は敗れた？ ……解らない。

魔樹が封印され自分達の敗北を悟った時、“それ”は機能が停止するよりも早く自らを弓矢のように変形させ、核となる部分を当時の人類の手が届かぬ場所、衛星軌道上にまで打ち上げた。

そして地球の周りを周回するデブリに自らを偽装し、来るべき再起の時に備え人類の観察に務めることにした。

……とはいえ、魔樹がない状態では大した事はできな
い。せいぜい自分の微細な一部を地上に落とし、適当な

生物にくつついてその生活を覗き見するのが関の山だ。

“それ”が特に注目したのは感情と呼ばれる人間が持つ思考性だ。

それはあまりに不安定で非合理的なものに見える。仮にそれが無く、全ての人類が種の発展にのみ人生を捧げ^{ささげ}ていれば人類は今とは比較にならないほど栄えていただろう。

どう考えても不要なもの。……なのにその感情は時に人間を飛躍的^{ひやくてき}に強くする。まるで計算が通用しない要素。それ故に自分達は敗北したと“それ”は断定する。

“それ”は人類を観察し、感情というものを学び始めた。全ては種の繁栄のため。いつか来る魔樹の復活の時、

今度こそ人類を滅ぼしこの星の覇権を得るために。……
少なくとも、その時点では、まだ。

四章 『少女は幸せを願う』

—ファイルへの魔力譲渡から一週間が経過した。

「それじゃ今日も始めようか？」

「はい！ よろしくおねがいます！」

今朝もいつものように、ファイルとアルカは丸椅子いすに座って向かい合う。

ファイルは手を水をすくう形にして前に出し、アルカは同じような手の形を作ってファイルの手を下から支えてやる。万が一魔力の暴走が起きた時にすぐに抑え込むため

だ。

「それじゃ最初は丸、三角、四角。それができたら球体、立方体、ピラミッド形、の順番でやってみようか」

「はい！」

ファイルは眼を閉じ、自分の中に宿った熱―魔力に意識を集中する。

身体の中にある熱を腕を通して手のひらに。すると手からもやのようなものが湧き出し、渦巻き始める。

さらにそれに意識を集中、もやはゆっくりと形を変え丸、三角、四角。さらに球体、立方体、ピラミッド形とアルカの指示した形へと順番に変化していく。

「うん、よし。この辺では失敗しなくなっただね。それじ

や次は少し難易度を上げるよ。星、魚、鳥、花。形はシンプルでいいからこれを順番に作ってみて」

「は、はい！」

ファイルは言われた通りにもやの形を変化させていく。

星……、魚……、鳥……、は――

「あっ!？」

花を作ろうとした所でもやの形が崩れてしまった。ファイルはがっくりと肩を落とす。

「少し肩の力を抜こうか。魔力の制御は一部だけを見るんじゃないなくて全体を見ること。大本になる部分から適量だけを型に流し込むイメージかな？」

「一部だけじゃなくて全体……適量だけ型に……」

ファイルはアルカの言ったことを繰り返しながら近くに置いてあつたメモ帳に書き込んでいく。

「それじゃもう一度、初めからやってみようか？」

「はい！ お願いします！」

ーファイルの魔法の才は……正直なところ、あるとは言えない。

少なくとも修行開始三日目で十本の指の先に別々の像を作つて見せたアルカのような、階段を二段飛ばしで駆け上がっていく天賦てんぷの才能はない。一つ一つ、順番に積み重ねていかなければならないタイプだろう。

それに他人から譲渡された魔力は扱いが通常よりも難しいのだ。おそらくまだまだ時間がかかる。

まずは魔力の暴走の危険を減らすために魔力制御の練習ばかりやらせているが、結構な頻度ひんどで失敗する。このペースだと海上都市とやらに着くまでに初歩的な魔法をいくつか習得できるかどうかといったところだろう。

だが、アルカは悲観してはいなかった。

魔力制御の練習ははつきり言っただけ失敗続き、普通も退屈な部類のものだ。しかもこれだけ失敗続き、普通なら少しぐらいくさったりするものだろう。

しかしフィルはそれが無い。何度失敗してもめげず、最初と変わらない集中力を維持し続けている。アルカは

それを好ましく思った。

一つ一つ順番に積み上げていかないけないタイプ？ なに、彼女なら問題ない。きつと彼女は積み上げて積み上げて、やがては大空に羽ばたいていく。

「やった！ アルカさんアルカさん！ できました！」
ファイルは今度はアルカに指示されていた形を上手うまく作りきつた。

「うん、魔力の制御もだいぶ上達してきたね」
そう言ってファイルの頭を撫なでる。するとファイルは「えへへ♪」とくすぐったそうに笑った。

機嫌良さそうに耳をピコピコ。前にも言っていた通り

頭を撫でられるのが好きなようで、眼を閉じてアルカに頭を撫でられるのを堪能している。

その姿を愛おしいと感じた。可愛らしいと思った。

昔、誰かが『初めての弟子は自分の子供みたいに可愛
いものだ』と言っていたと思うが……なるほど、その気
持が今ならよくわかる。こうして頭を撫でているところ
ちまで幸せな気持ちになってくる。

一応、師匠の威厳的なものもあるので自戒しているが、
気を抜くとついつい甘やかし過ぎてしまいそうだ。

「……うん。よし、このまま魔力制御が安定してきたら
簡単な魔法の練習でも始めてみようか？」

「本当ですか!？」

ファイルがパツと表情を明るくする。ああ、かわいいなあもう本当に。

「そうだな……。最初は基本になる肉体や五感なんかの強化、それに魔力障壁辺りから初めていこうか。しつこく言うけど、くれぐれも魔力の制御はおろそかにしないこと。興奮しすぎて魔力が暴走しそうになったりしたら魔力制御の基礎からやり直しだからね？」

「は、はい！ 気をつけます！」

穏やかな時間だった。暖かい時間だった。千年の孤独を埋めるような、そんなー。

ピンポーン、と。部屋のインターホンを鳴らす音がし

た。

アルカとファイルは視線を交わし「私が出ますね」と言
つて、トコトコとファイルがコンソールの方に駆けていく。
アルカはファイルが応対する様子を見守っていたのだが
……何やら様子がおかしい。

「どうかしたのかい？」

「えと、よくわかりません。ただアリスちゃん、ラル
ド君、レイス君が話があるから入れて欲しいって」

「アリスちゃん達が？」

「アリス、ラルド、レイスは三人共十一歳でファイル
を除けば子供達の中で最年長。大人っぽくて小悪魔チツ
クなどところがあるアリス、いかにも元気小僧といった感

じのラルド、少し気だるげな感じのレイスの三人組だ。性格も得意分野もバラバラなのだが仲が良く、だいたいいいつも一緒に行動している。ファイルが子供達のリーダーだとするなら彼女らはムードメーカーといったところだろうか。

……なのだが、扉を開けて入ってきた三人にはいつもの快活かいかつさはなく、ラルドとレイスが真ん中にいるアリスに付き添うようにしつっ暗い表情を浮かべている。

そして二人に付き添われたアリスはと言うと、いつもの大人っぽさは微塵みじんもなく、まるで悪いことをして怒られる直前の子供のような顔をして俯うつむいていた。

「アルカ兄さま、ファイル姉さま……私……」

今にも泣き出しそうな不安げな声。

アルカはアリスの前で膝ひざをついて目線を合わせると、安心させるように柔らかく笑う。

「大丈夫だよ。どうしたの？」

「これ、見て欲しいの……」

アリスはブラウスのボタンをいくつか外すとグイと引っ張って肩の部分を露出させる。

—アリスの肩に紋様もんようのような痣あざが浮かんでいた。

「っ?!?!」

動揺を見せてはいけないと思っていたのにアルカは言葉葉を失ってしまった。暖かかった空気が一気に零下まで冷え込むような感覚だった。

「その……この避難船に乗る前、街が魔獣の群れに襲われた時、虫みたいな魔獣に小さなトゲを刺されたの」
 ぽつりぽつりとアリスは話す。

「それで……その……皮膚ひふの中に入り込んで、取れなかったけど痛くもなかったから、それで……みんな大変そうだったし心配かけちゃいけないって思って……そのまま放っておいたの……そしたら……」

アリスの言葉を聞きながら痣を確認する。信じたくなかったが間違いない。

—瘴気しょうきによる侵蝕だ。

「あの……私、どうなるの……？」

アルカはその問いかけに答えられなかった。舌が喉のどに

貼^はり付いて言葉が出ない。どうにか辛^{かる}うじて表情に出さないようにするのが精一杯だ。

……このままいけば、彼女は二十四時間以内に死亡し、魔獣化する。

有効な対策は、魔獣化する前に殺すこと。
遠くなっていた過去の記憶が脳裏^{のうり}をよぎる。……母親が泣きながら我が子を絞め殺し、その後自らも命を絶つ地獄の光景を。

—殺せというのか？—
—ここまで一生懸命生きて、—
緒に旅してきたこの子を？

……と、その時、アルカがアリスの話の話を聞いている間にいつの間にか部屋を出ていたらしいファイルが戻ってきました。

「アルカさん、すいませんちよつとどいてくださーい」

「え……ああ……」

「アリスちゃん、少しチクツとしますよ？」

アルカが数歩下がって見ているとファイルはおそらくは医務室から持ってきたらしいカバンから、針の付いた筒のようなものを取り出した。

後で聞くことになるのだがそれは注射器というものだ。ファイルはその針をアリスの腕に刺し、血を抜いている。

「ナビ」

『承知した』

短いやり取り。ファイルは先程抜いた血を透明な容器に入れ、ナビに渡す。ナビはそれを自分のボディの内側にしまい込むとウィンウィン音を立て始めた。

(いったい……何を……?)

しばらくするとウィンウィンと鳴っていた音が止まる。ナビは空中に様々な文字と数字が記された映像を映し出した。

『解析終了。ステージ1と診断。現段階であれば投薬による治療が可能である』

「え……?」

アルカは思わず聞き返した。

「治……るの……？」

「はい。まだ間に合います」

—これまで、アルカはこの時代で様々なものに触れてきたが、それでもまだ心のどこかで科学というものを甘く見ていた。

科学には魔法のような超常の力はない。
にもかかわらず、何故^{なぜ}人類はこれ程までに発展したのか。どうやって、かつてたった一年で人類を滅亡寸前まで追い詰めた瘴気と魔獣の脅威に十八年もの間抗い続けるだけの力を得たのか。

—魔法を失ってからの長い長い年月。ただひたすら、
試行錯誤を積み重ねていたのだ。

魔法という奇跡ではなく科学という必然を求め、何千
回でも何万回でも何億回でも、考えて考えて試して試し
て試しぬいた。その狂気にも似た積み重ね。

アルカは甘く見ていた。かつて数千万人もぎせいしやの犠牲者を
出した黒死病を始め、あらゆる病に打ち勝ってきた科学
の力を、人類の意地と底力を。

「は、はは。すごいな、科学というものは……」

—死ぬしかなかつたものを治療が可能と言える。そ
れがどれほどの偉業かはたして彼等は理解しているだろ

うか？

……いや、理解していなくてもいい。それが当たり前前であると思える程に普及させたことまで含めて素晴らししい……いや、^{すさ}凄まじい偉業なのだから。

「ええ、ただ……。ラルド君、レイス君。アリスちゃんを医務室に連れて行ってくれませんか？ 放送でナビの本体の方から指示があると思うから、それに従ってね？」
 フィルにそう言われ、三人は医務室に向かう。それを確認するとフィルはあらためてアルカの方に向き直った。

「この船にはもう、薬が無いんです」
 『元々はそれなりの備蓄があったのだが、街を襲撃された際の負傷者の治療で使い切ってしまった』

ファイルとナビの言葉を聞く。薬が無い、だが先程のよう
に絶望したりはしない。

「方法と猶予時間は？」

『検査結果から考えて五時間程度。それを過ぎればステ
ージ2に移行し、投薬による治療は困難になる。薬自体
はそれほど希少なものでないので医療施設等の跡地で
あれば入手は可能だろう。ただ……場所が悪い』
ナビは空中に周辺の地図を表示する。

青い光点で船の現在地が示され、そこから少し離れた陸地に
白い光点で『医療施設』と表示された。だがその場所は『侵入
危険地帯』として真^ま赤^かに塗りつぶされたエリアの中だった。

『現在地から猶予時間内に到着し、物資の回収を見込め

る医療施設はこのみである。高濃度の瘴気で汚染されたエリアの中にあり、多数の魔獣の襲撃が予測され極め^{きわ}て危険。……当機としては、全体の安全を考えるのであれば彼女を見捨てるのも選択肢の一つと……』

「それだけは絶対に駄目です！」
ナビの言葉を遮^{やぶ}ってファイルが叫ぶように言った。ナビもファイルならそう言うだろうとわかっていたようで、それ以上意見することはなかった。

「では、進路を変更。目的は当該医療施設での物資の回収^{およ}及び^{およ}アリスIIアリリカの治療。我々は医療施設最寄^{もよ}りの港から上陸し、港から約二・五キロの距離にある医療施設で物資を回収。その後船へ帰還し、患者の治療にあ

たる。港までの所要時間は約二時間と推定。多数の魔獣との戦闘が予想されるため装備の確認及び厳選を。そして……アルカリーニールク」

淡々とこれからやるべきことを述べていくナビは最後にアルカの方にカメラを向けた。

「なんだい？ 僕にできるとなら何でも言っ
て欲しい」

アルカのその言葉にナビが答えるのには少し間があった。

『……貴殿きでんは船に残り、船の防衛にあたって欲しい』

「……え？」

『今回、医療施設での物資の回収には当機とファイルフ

エンリットののみであたる』

十

ナビがアルカに船に残れと言ったのはごく単純な理由、アルカ以外に魔獣が蔓延^{はびこ}る危険地帯で船を防衛できざる者がいないからだ。

そもそも、ナビが危険を避けるために尽力していたのも大いにあったが、この船がアルカと出会うまで無事に航海を続けられた時点で奇跡的なものだった。

まともに戦える者はファイルしかおらず、そのファイルにしても自分一人だけ逃げるのならともかく、他の子供達を護^{まも}りながら

魔獣と戦つとなるとせいぜい小型の魔獣十匹程度が限界だ。

それ以上の群れ、もしくは中型以上の魔獣一体とでも遭遇していれば為す術無く全滅していたことだろう。そしてこれから向かう危険地帯は百匹以上の群れや大型、或いはそれより遥かに危険な魔獣が当たり前にいる場所だ。

アルカが船を離れてしまえばそれらへの対抗手段がなくなる。薬を手に入れて戻ってみれば、子供達が皆殺しにあっていたなど洒落にもならない。

船の甲板。時刻は昼前で、空は晴れてはいるものの高濃度の瘴気の影響で陽の光は淡い。

ファイルはナビの表示するマップと船から見えてきた港、そしてその奥にあるビル街を見比べブツブツと何かを呟つぶやいている。

おそらくは病院までのルートを頭の中に叩たたき込んでいるのだろう。その様子をアルカは心配そうに見ていた。視線に気がついたのかファイルがアルカの方を振り向く。そしてアルカを安心させようとするように柔らかく笑った。

「もう、アルカさん！ そんなに心配しなくても大丈夫ですって！ 私、逃げ足には自信があるんですから」

—アルカはファイルの足が僅わずかに震えていることには気づかないふりをしておいた。

「うん。だけどくれぐれも気をつけてね？」

「はい！ ……それじゃ、そろそろ港に到着するので準備してきますね」

「……ああ、ちよつと待ってくれないかな。君に預けておくものがあるんだ」

ファイルを呼び止めるとアルカは懐ふところから紅い宝石のペンダントを取り出し、それをファイルの首にかけた。ファイルはキョトンとした顔で宝石を手取る。

「アルカさん、これは？」

「お守りだよ。千年前……僕の仲間達がくれたものなんだ」

「え!?! そ、そんな大切なもの……」

「もちろんあげるつもりはないよ？　それは僕にとってもすごく大切なものだからね」

アルカは膝をついてファイルとまっすぐに眼を合わせる。「だから無事に帰ってきて、ちゃんと僕に返しにくるんだよ？」

様々な感情がこもった声。ファイルはジッと手の中で赤く輝く宝石を見つめ、小さくうなず頷くと宝石を自分の服の中にしまい込む。

「わかりました。必ずお返しします。それじゃああらためて……、行ってきます！」

「ああ、行ってらっしゃい」

そうしてアルカは手を振ってファイルを見送った。

十

地球衛星軌道上。“それ”はアルカの様子を静かに見
ていた。

そして、アルカが送り出した赤い髪の少女の姿も。

『……………』

血のような赤い眼が、僅かに細められた。

十

―上陸してから約三十分後。ファイルは病院の廊下を

歩いていた。

「……ここまで上手くいつちやうと、なんだか逆に恐い
ですね」

『フィルーフエリット。油断は禁物である。ここが危険地帯であることに変わりはない』

ーフィルはすでに“目的の薬を入手していた”。
ここまでの行程は本当に恐いほどに順調だった。

上陸して物陰に隠れるとナビはまず生体センサーを起動させ、周囲の魔獣の位置を探った。

凄まじい数だった。高濃度の瘴気の影響でセンサーの索敵範囲が狭せばまっていたのもあるが、その索敵範囲の大半を魔獣を示す赤い光点が埋め尽くしていた。

―だが“偶然にも”病院までの最短ルート上には魔獣がまったくいなかっただのだ。

持ってきた銃を一発も撃つこと無く病院に到着したファイルは院内案内を確認。目的の薬が十階にあるだろうことがわかると苦い顔をした。

階段を上っている時に魔獣と遭遇すれば最悪だ。狭く逃げづらく、脇わきをすり抜けて行くのも困難な上に挟み撃ちの危険もある。

しかし“幸運にも”ファイルが十階まで駆け上がる間、魔獣に襲撃されることはなかった。

そしてそのまま実にあっさり、船にいた時には内心おび怯えていたのが馬鹿馬鹿しくなるほど簡単に、ファイルは

目的の薬を手に入れたのだ。

「何にせよ、これで後は船に戻るだけです」
ファイルは廊下を足早に歩きながらそう言った。

本来なら船に戻るだけというものもなかなか困難なものはずなのだが、行きがあまりにも簡単だったためにそんな気がしない。それとも『行きはよいよい帰りは怖い』という言葉が極東の島国にあるらしいが、そういうものなのだろうか？

ファイルは廊下の窓から街を見下ろし、見える範囲の通りのルートを眼で辿ってみる。……やはり魔獣がない。「もしかしてアルカさんからもらったお守りのご利益だ

「つたりするんですかね？」

『疑問。魔法というものの存在こそ認めているが流石にさすがそれは……警告。ファイルルーフエンリット。魔獣の接近を確認』

ナビの警告にファイルはすぐに表情を引き締め警戒態勢に入った。

「ナビ、詳しく」

『対象は一体。前方の曲がり角を曲がった先にいる。ゆつくりとしたペースでこちらに接近中。大きさからして人間大……小型の魔獣に分類されるものである』

「小型の魔獣……ですか」

ファイルはチラリと装備を確認する。大丈夫。小型なら

もう何度も倒している。なんにも問題はない。

「放っておいて後で後ろから攻撃されるのは避けたいです。ここで待ち伏せして倒しましょう」

『了解。当機もその判断は妥当だとうであると考える』

戦闘になってはぐれてしまわないように、ファイルはナビがプロペラを格納するのを確認してから腰に付けたポーチに入れた。

ポーチからひょこつと顔を出すナビの姿を少しだけ『かわいいな』と思いつつファイルはライフル銃を構える。

照準は前方の曲がり角へ。ファイルの耳がペタペタと廊下を歩く音と何かを引きずる音を聞き取る。近づいてくる。

—油断があつた。—ここまでがあまりに上手くいぎ過ぎて心の緩みゆるがあつた。ゆえに、その魔獣と遭遇した時に動揺して、対応が僅かに遅れてしまった。

曲がり角から姿を現したその魔獣は……全身がかさぶたのようなものに覆おおわれた異形いぎようの姿をしていた。

「っ!？」

シルエットは人間に近いが眼と鼻が無く、耳があるべき場所には穴が空いているだけ。口は笑つたような形で大きく裂け、黒ずんだ乱杭らんぐいば歯が並んでいる。毛のない全身は醜みにくいかさぶたのようなものに覆われ、異様に長い両腕は凶悪な鋭い爪つめを備えズルズルと床を引きずっている。

その異形の魔獣はファイルの方に顔を向けるとニタリと
□^{くちは}端をさらに吊^つり上^あげた。

「異形変異種!？」

『対象特定！ 第三級特別危険指定魔獣、プレデター！
逃走せよファイル！フエンリット！ その魔獣には絶対
に勝てない！』

— 異形変異種。

瘴気に侵食されて魔獣化した生物は大なり小なり身体
の一部が変異する。

腕が触手のようになったり身体が異様に巨大化したり、
だがそれでも元の生物の面影を多く残しているものがほ
とんどだ。

しかし極稀ごくまれに、元が何であつたのか判別できないほどにまで異形の姿に変異してしまふものもある。そういうたものの生態は千差万別せんさばんべつでなかなか一纏めひとまとにはできないが、一つ共通点がある。……その全すべてが強大な戦闘能力を有している点だ。

『キイイイイイイイイイイッ！！！！』

「きゃあっ!?!」

異形変異種……プレデターは悲鳴のような甲高い雄叫おたけびを上げた。

空気が震え、窓ガラスに亀裂が走る。ただでさえ人並み外れた聴力を持つファイルは思わず身をすくませてしまった。——雄叫びを上げて怯ひるませ、その隙すきを突いて対象

を殺害する。それがプレデターの狩りの常套手段^{じょうとうしゅ}だった。見た目からは想像がつかない俊敏さでプレデターは距離を詰め長い腕を横薙^なぎに振るう。ファイルは咄嗟^{とつさ}に持つていたライフル銃を盾^{たて}にした。金属がねじ曲がる音。薙ぎ払^{はら}われる。床から足が離れる。ーファイルの小柄な身体が吹き飛び、窓ガラスを突き破った。

「……………え？」

ファイルは自分に何が起きたかすぐには理解できなかつた。

足が床に着かない。身体が宙に浮いている。眼を足の方に向けると、さっきまで自分がいた病院の窓が見えた。

やがて身体は重力に引かれだす。――落ちている。十階の高さから落ちている――！

「――っ！――っ!?」

やみくも 闇雲に手足を動かす。だがその手足は空を切るだけで何かに触れることはない。

「や……や……いやあああっ!?」

思わず悲鳴を上げた。――どうする？ どうすればいい？ 何をすれば助かる？ どんな手がある？ 必死に思考を加速させる。

――助かる手段が無い。頭の中の冷静な部分がそう結論付ける。息ができなくなる。頭が真っ白になる。そうだが、この状況から助かる手段なんてあるわけがない。数

秒後にはアスファルトの地面に叩きつけられる。——この高さなら即死はまぬがれない。

（嫌だ。だって、私はまだ……もつと……アルカさんと……！）

いくつもの死にたくない理由が頭に浮かぶ。……その中で真っ先に浮かんだのがアルカのことだったのが自分でも少し意外だった。

「助けて！ 誰か……！ 私はまだ……生きたい……！」

アスファルトの地面が目前に迫る。ギュツと眼をつぶる。……その時だった。

胸元に急に熱を感じた。バチバチと身体を電流が走る

ような感覚があった。手が勝手に動いて地面を指差し、小さな円を描く―地面に魔法陣が展開された。

ボフン、と。まるでクッションに落ちたような感触だった。気がつけばファイルはワンバウンドして、すとなんとアスファルトにへたり込むような形で着地していた。

「……………へ？」

呆^{ほう}けたような声を出す。今度は本当に、何が起きたのかまったく理解できなかつた。

ただ、胸元に熱を感じた。服の上からそこに触れてみる。そこには紅い宝石のペンダント―アルカからもらったお守りがあった。

『避ける！ ファイルーフエンリット！』

ナビの言葉に我に返る。顔を上げると救急車がこちらに“飛んできていた”。

「きゃあっ!？」

咄嗟に地面に身を投げだして避けた。すぐ後ろでアスファルトに叩きつけられた救急車がグシヤグシヤになっただ。飛んできた方向を見るとプレデターがもうすでに地上に降り立っていた。

プレデターはケタケタと笑うように口を動かすと長い腕を伸ばし、近くに乗り捨てられていた自動車を掴つかんだ。

細長かった腕が異常な程に隆起りゅうきする。プレデターは自動車を軽々と持ち上げ、野球の投球のように振りかぶる。

—走って—!

頭の中で知らない誰かの声がした。即座に地面を蹴つて走り出す。先程までいた場所を軽自動車がボールのよううに転がっていった。

走る。逃げる。脇目わきめも振らず全速力で逃走を開始する。後ろでプレデターの走る音が聞こえる。振り返りたい気持ち在必死に抑え込み走ることだけに集中する。怖い。怪物が追ってくる。恐くてたまらない。……なのにいつもより身体が動いた。頭が冴さえていた。胸元でアルカからもらったお守りは今も熱を発し続けていた。

走る。走る。走る。肺が痛い。酸素が足りなくて頭がクラクラする。それでも懸命に走り続けた。自分でも驚

くほどに速く走れた。

ビル街を抜けた。ある程度開けた港のエリアに入る。
苦しい。心臓が痛い。でも、あともう少し、船まで
……アルカの所まで逃げれば助かる。ファイルは心の中で
自分をそう励まし……急に自分がいる場所に影が差した。

『上方！ 停止せよ！』

ナビの言葉にファイルは急ブレーキをかけた。その直後、
目の前に空から大型トレーラーが降ってきた。

もし、後少しでも止まるのが遅ければ今頃いまごろファイルの小
さな身体はトレーラーと同じくグチャグチャに潰つぶれてい
ただろう。だがそれに安堵あんどする暇は一瞬も無かった。

振り返る。――すぐそこに大きく開かれたプレデター

の乱杭歯があつた。

「—っ!？」

咄嗟に頭を上半身ごと大きく仰け反らせた。眼の前でプレデターの口がバクンと閉じられる。一瞬見えたその表情は狩りを楽しんで笑っているようにも見えた。

プレデターはまるで武術の達人のような動作で身をひるがえ返し、不安定な体勢のフィルの腹部に後ろ蹴りを叩き込んだ。

「あぐ……っ!!」

蹴り飛ばされ、先程のトレーラーに背中から叩きつけられる。衝撃で息ができない。身体が動かない。そのままずり落ちるようにして地面にへたりこんでしまった。

『ファイルIIフェンリット!!』

ナビの声が遠く聞こえる。吐きそうになるのをどうにか堪え、顔を上げる。

プレデターは先程までとは打って変わってゆっくりとこちらに近づいてきていた。腰のホルスターから拳銃を引き抜きプレデターの顔面目掛けて発砲する。だが、効かない。銃弾はプレデターの肌を覆うかさぶたにめり込むだけで止まり、皮膚を貫通できない。

プレデターはケタケタと笑うように口を動かしている。逃げられない。まるで獲物が絶望する様子を楽しみたいかのように、ゆっくりとした動きで異形の爪が振り上げられた。

「……………っ!!」

恐怖で眼をつぶる。―次の瞬間、肉が裂けるような鈍い音がした。

「……………?」

だが、覚悟していたような痛みはなかった。恐る恐る眼を開ける。

―見慣れた背中があつた。左腕を盾にしてプレデターの爪を受け止めている。……………腕にはプレデターの鋭い爪が深々と食い込んでいた。袖^{そで}がみるみる内に赤く染まっ
つていく。

「大丈夫かい？」

アルカだった。アルカは無事な右腕に持った杖つえで地面を叩く。アスファルトがいくつもの槍のように隆起しプレデターを襲う。

だが、プレデターは大きく飛び退いて距離を取り、それを回避した。

「アルカさん!？」

「よかった……。念のために迎えに来たけど正解だったみたいだね」

ファイルの姿を見て心底安堵した表情でアルカはそうこぼした。

「腕が……。そ、それに船は!? 船はどうしたんです!？」

そうだ。アルカの心配はもちろんあるがそれ以上に船のことだ。

元々ファイルがここに一人で来たのもアルカに船を護つてもらったためだ。こうしてアルカがここにいるということとは船は今無防備ということ。

今この瞬間、船に残してきた子供達が魔獣に貪り食われていても何ら不思議ではないのだ。

ファイルの言葉にアルカは少しばつが悪そうに頬を掻いた。

「……いや、その……最初は大人しく待ってるつもりだったんだけどさ。なんだか嫌な予感がしたし、遠くから

なんかものすごい音とか聞こえてきたから……」

アルカはそう言って苦笑いする。

「だから、ちよつと……いや、かなり無理はしたけど、持ってきたんだ」

「……持ってきた？」

辺りに影が差した。最初は雲が太陽を隠したのかと思つた。……だが、それにしても様子がおかしい。ファイルは空を見上げる。

「……え？ え、え、ちよ……アルカさんっ!？」

——あまりはつきりとした数字までは覚えていないが、たしか自分達が乗ってきた船の重量は一万トンとか二万トンとか、そんな感じの単位だったはずだ。

それが、飛んでいった。まるで飛行船のように空に浮いていた。

「フィルちゃんが港まで逃げてきてくれて良かったよ。流石にこれを持ったままあの塔とうがいつぱいある所……ピルって言うんだっけ？ あそこに入るのは無理そうだったからね」

いつもの穏やかな声でそう言って「さて……」と声を低くしながらアルカはプレデターを見た。

「僕の可愛い愛弟子まなでしを、ずいぶん可愛がってくれたみたいだな……？」

声に殺気が乗っている。それを感じたのかプレデターも一歩たじろいだ。だが、今回に関してはフィル

は不安を感じていた。

—今のアルカは、普通に戦闘ができるのか？

大型船を浮かべるといっものは、いくらアルカでも相当
厳しいことではないのだろうか？ その証拠に、アルカ
は先程フィルを庇かばって左腕を負傷した。

普段の彼であればそんなことをしなくても障壁を張る
なりして容易たやすくプレデターの攻撃を防げたはずだ。

攻撃に関しても。アルカの戦いぶりは何度か見ている。
普段のアルカなら回避する隙も与えず初撃でプレデタ
ーを仕留めていたはずだ。なのにそうしなかった。いや、
おそらくはできなかつた。

そしてプレデターから受けた傷。相当深そうだ。袖は

真っ赤に染まり、アルカの額には脂汗が浮かんでいる。

今の状態ではいかなアルカでも危ないのでは？ 一抹の不安がフィルの頭をよぎる。……と、そんなフィルの視線に気がついたのか、アルカはフィルの方を見て柔らかに笑った。

「なに、心配することはないさ。少し無理はしてるけどその分とっておきの武器があるからね」

「……武器？」

「うん。たぶんものすごい音がするから耳を塞いふさどいた方がいいかな？ あとナビ……の本体の方。くれぐれも子供達を避難部屋から出さないように。揺れと衝撃を無効化してるのあの部屋だけだから。それと、船全体に保

護の魔法はかけたから大丈夫とは思うけど、念の為に後で破損とかのチェックよろしくね」

アルカはそう言うのと杖でアスファルトを叩く。一瞬の内にプレデターの足元が鎖のように変化して足に絡みつき、動きを拘束する。——そこに船が降ってきた。

「へ？ ちよっ!？」

『ギ……ッ!？』

そんなもの、防げるわけがない。プレデターは断末魔を上げる暇もなく船に叩き潰された。空が落ちるような轟音ごうおん。あまりの衝撃に地面が大きくひび割れ地震のように揺れた。

「……よし。………つっ」

プレデターを倒したのを確認すると、アルカはその場に崩れ落ちるように膝をついた。

あまりの出来事できごとに呆けていたファイルだがそれで我に帰った。—魔力は生命力に直結したもので、度が過ぎた使い方をするれば肉体もどんどん衰弱していく。以前にアルカからそう聞いていた。

加えて出血がひどい。服の右腕の部分は真っ赤に染まりきり、染しみ込みきれなくなつた血がポタポタと地面に滴したたっている。すぐにでも手当てするべきだろう。

「アルカさん！ 怪我けがの……わぶっ!？」

アルカの前に回り込み『怪我の手当てをするから腕を

出してください』と言おうとすると、先に思い切り抱きしめられた。

「あの、アルカさん？ 怪我の手当て……」

「ああ……良かったあ……。君が無事で本当に良かった……」

アルカは目尻に涙を浮かべてそう言った。そうやって無事を喜んでくれるのは嬉うれしかったが、今のファイルはそれより早くアルカの手当てをしてあげたかった。

「わ、私は大丈夫ですから。それよりもアルカさんの怪我を……」

「僕は大丈夫。そんなことより君の方は怪我してないかい？ 女の子なんだし傷が残ったら大変だ」

……大丈夫と言っているが、怪我した方の腕はさつきからだらんと下がったままで、ボタボタと血が滴って足元に血溜まりちだを作っている。どう見ても大丈夫に見えない。

「いえ、多少は怪我しましたがけど大したことないですから。それよりアルカさんの……」

「怪我したのかい!? どこ? 治すから見せて……ああ、くそ、今の魔力じゃ治療魔法は厳しいか……。うん、よし、できるだけ早く船を海に戻すから! それで帰ったらすぐに治療を……」

「いえ、だから私は大したことないのでまずはアルカさんの手当てを……」

「僕は大丈夫だつて。そんなことより歩けるかい？
平気？ どこか痛くない？ 何だつたら肩を貸すけど
……」

「手当て……」

「ナビ。後でファイルちゃんを連れて行くから先に戻って
準備をしておいて欲しい。見た感じ大きな怪我は無さそ
うだけど念の為にね」

……なんかだんだんイライラしてきた。

「アルカさん!!」

大きな声を出した。アルカがビクツとした。

「あ、あれ？ ファイルちゃんなんだか怒って……え？

何して……あいたあつ!!?」

ファイルは手早くベルトを外すとそれをアルカの腕に巻き付け、ギユツとかなりきつめに締め上げた。

「痛い!? ちよっ!? ファイルちゃんこれキツいよ!」

「キツくて当たり前です止血帯しけつたいの代わりなんですから！
とにかく船に戻りますよ！ 戻ったらすぐに手当てしますから！」

「いや、でもファイルちゃんの手当て……」

「誰が！ どう見ても！ アルカさんの方が重傷でしよう!?」

「手当て……」

「次言ったら本気で怒りますよ！」

—何故か無性に腹が立った。助けてもらったのは自分で、アルカは自分のことを心配してくれたのに、何故だかそれに苛いらついた。

ファイルはアルカと並んで帰り道を歩きながらそのことについて考えていた。

アルカが優しい人だというのは知っている。他人に甘いのも知っている。自分を犠牲にしても他人を助けようとしてしまう人だとも知っている。

けれど、なんでさつきは怒ってしまったのだろうか？

多分、出会ったばかりの頃ならこうは思わなかった。アルカの治療を優先しようとはするだろうが「心配か

けて申し訳ないな」と思うだけで今みたいに怒り出すことはなかっただろう。なのに、どうして……。

「何にせよ……」

アルカはフィルの頭を撫でる。

「君がこうして帰ってきてくれて、本当に良かった」
噛みしめるような、本当に嬉しそうな声だった。

アルカの顔を見上げると心底安心したような顔で笑っている。……心臓がトクンと鳴る音が聞こえた気がした。形はどうあれ、アルカがそうして喜んでくれるのが嬉しかった。

（――ああ、そっか）

フィルはそれで自分が怒った理由に気がついた。

（私は、アルカさんに幸せになつて欲しいんだ）

優しいアルカが好きだ。他人について甘くしてしま
うアルカも好きだ。だけど自分を犠牲にしてしま
うような姿は……嫌いじゃないけど見たくない。

もっと自分のために生きて欲しい。自分を犠牲になん
てして欲しくない。千年前も、今も、他人のために頑張
ってきたアルカだからこそ、誰よりも幸せになつて欲し
いのだ。

「ねえ、アルカさん？」

「ん？ なんだい？」

「手、つな繋ぎませんか？」

「……へ？」

「嫌ですか？」

「え、あ、嫌じゃないけど……ああ、うん、はぐれたら困るしね。繋ごうか」

「はい♪」

アルカが自分のことをとても可愛がってくれているのはよくわかっている。だからこちらもこうして親愛の情を示したら喜んでくれるかな？ と、そう思って手を繋ぐ。

大人の男性の大きな手。こうしてみると自分の手はまだまだ小さいなとあらためて思う。

横目でこっそリアルカの表情を観察してみると……—
応ポーカーフェイスを保とうとしているようだが隠しき

れてない。嬉しそうだ。

アルカに喜んでもらえたようなのが嬉しくて自分の頬もついでに緩んでしまう。

（手を繋ぐなんて小さな子供みたいで少し気恥ずかしいけど、これならやった甲斐かひは………あれ？）

ファイルは自分の胸に手を当てた。トクントクンと心臓の音がする。いつもより脈が早い。それに………何か胸がうずくような感覚がある。少し苦しい。なのにそれは決して不快なものではない。むしろ、何故か心地こころ良ちく感じるものだ。

（どうしたんだろ？ 私………）

それはファイルがこれまで生きてきた中で初めて感じる

不思議な感覚だった。

（まあ、いつか）

だって、何だか今、幸せだ。

そうして、アルカとファイルは帰路を急ぐのであった。

G A 文庫 11 月の新作 『最果ての魔法使い』

試読版—完



今
甦
った魔法使い
による

伝説の続きが紡がれる！

「最果ての魔法使い」は11月15日ごろGA文庫より発売予定